

# 政談月の鏡

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫



政談月の鏡と申す外題げだいを置きまして申し上るお話は、宝曆年間ほうれきの町奉行で、依田豊前よだぶぜんのかみ守み様の御勤役中に長く掛りました裁判であります。其の頃は町人と武家ぶげと公事くじに成りますと町奉行は余程むす六ヶしい事で有りましたが、只今と違ひまして旗はたもと下は八万騎、二百六十有余頭かしらの大名が有つて、往來は侍で目をつく様です。其の時の江戸の名物は、武士、鯉、大名小路、広小路、茶見世、紫、火消、錦絵と申して、今の消防方は四十八組有つて、火事の時は道路が狭いから大騒ぎです、焼出やけだされが荷を担いで逃げ様とする、向むこから町奉行が出馬に成る、此方こつちの曲角からお使番が馬で来る、彼方あちらから弥次馬が来る、馬だらけに成りますが、只今は道路の幅が広くなりずと見通せませんが、以前は見通しの附かんように通路とおりみちが迂曲うまて居りましたもので、スワと云うと木戸を打ち路次を締める、少しやかましい事が有ると六ツ限むぎりで締切ります、此の木戸の脇に番太郎がございまして、町内には自身番うしろが有り、それへ皆町内から町内の家主いえぬし（差配人さん）がお勤めに成つて、自身番うしろの後の処がが屹度番きつと太郎に成つて居たもので、番太郎は拍子木を打つて夜廻りを致す丈だけ

の事でスワ狼藉者だと云つても間に合う事はない、慄ふるえて逃げて仕舞い、拍子木を溝どぶの中へ放り出して番屋へ這はい込むなどと云う弱い事で、冬になると焼芋や夏は心ところてん太とを売りますが、其の他た草履草鞋を能く売ったもので、番太郎は皆金持で、番太郎は越前から出る者が多かつたようで、それに湯屋の三助は能登国のとのくにから出て来ます、米搗こめつきは越後と信濃からと極つて居ました、江戸ツ子の番太郎は無い中に、長谷川町の木戸の側わきに居た番太郎は江戸ツ子でございます、名を喜助きすけと云つて誠に酒喰さけくらいですが、妙な男で夜番よばんをする時には堅い男だから鐘が鳴ると直すくに拍子木を持つて出ます、向うの突つきあたり当あまでちゃんと行つて帰つて来ます。大概の横着者は、チョンくチョンくと四つ打つて町内を八分程行くと、音さえ聞えれば宜いいんで帰つて来ますが此の男は突当りまで見廻つて来ないと気が済まないと言いう堅い人で、ボンチョン番太と紳名あだなが有る位で何どう云う訳かと聞いて見ると、ボンと云う鐘とチョンと打出す拍子木と同じだからボンチョン番太と云う、余程堅い男だが酒が嗜すきで暇まさえあれば酒を飲みます、女房をお梅と云つて年齢は二十三で、亭主とは年齢が違つて若わかうございますが、亭主思いで能く生なま酔まの看護もりを致しますので、近所の評判にあの内儀かみさんは好いい女だ喜助の女房には不釣合だと云われる位ですが、誠に貞節な者で一体情の深い女でございますから、本当に能く亭主の看護を致して、嗜すきな物を買つて

置き、

梅「寒いから一杯お飲<sup>た</sup>べかえ、沢山飲むといけないよ、二合にしてお置よ、三合に成ると少し舌が廻らなくなる、身体に障<sup>さわ</sup>るだろうと思つて案じられるから」

喜「うむ寒いな、霜月に這入つてからグツと寒く成つた何<sup>ど</sup>うしても寒くなると飲まずにや居られねえな」

梅「寒い<sup>ちだい</sup>たつて、寒い訳だよ、朝から飲<sup>ちだい</sup>んでるからもう酔<sup>ざめ</sup>い醒<sup>さめ</sup>のする時分だからさ、町<sup>ま</sup>代の總<sup>そうすけ</sup>助<sup>すけ</sup>さんが来て余り酒を飲<sup>み</sup>ましちやアいけない、あれでは身体<sup>た</sup>が堪<sup>たま</sup>るまいと被<sup>おつし</sup>仰<sup>や</sup>つて案じておいでだよ、皆<sup>みなさん</sup>様が御<sup>ご</sup>鼻<sup>ひ</sup>貞<sup>い</sup>だから然<sup>そ</sup>う云<sup>い</sup>つて下さるんだよ」

喜「もう是れ限<sup>ぎ</sup>り飲<sup>み</sup>まねえから、よう宜<sup>い</sup>いからもう一本爛<sup>つ</sup>けなよ」

梅「爛<sup>つ</sup>けなつてお酒が無<sup>な</sup>いんだよ」

喜「無<sup>な</sup>けりやア買<sup>か</sup>つて来<sup>き</sup>ねえな、おい」

梅「もう今日はこれだけにしてお置きな」

喜「熱<sup>あつ</sup>い時分ならそれで宜<sup>い</sup>いが、寒い時分には二合じやア足りねえ、ようお前<sup>めえ</sup>能<sup>よ</sup>く己<sup>おれ</sup>の面倒<sup>めんどう</sup>を見て可愛<sup>かわい</sup>がつて呉<sup>く</sup>んな、其の代<sup>しろ</sup>り己<sup>おれ</sup>がお前<sup>めえ</sup>を可愛<sup>かわい</sup>がつて遣<sup>や</sup>る事<sup>こと</sup>もあらア」

梅「お戯<sup>ふざ</sup>けでないよあのお店<sup>たな</sup>から酒<sup>さかな</sup>の下物<sup>さかな</sup>にしろつて台所<sup>だいしよ</sup>の金<sup>きん</sup>藏<sup>ぞう</sup>さんが持<sup>も</sup>つて来<sup>き</sup>た物

があるよ」

喜「彼奴め下物だつて鮭の頭位だろう、あゝ有難い持つべきものは女房か、有難いな、何うしたつても好い酒は四方へ行かなければ無えな」

とクビりく飲んで居る、其の時店先へ立止りました武士は、ドツシリした羅紗の脊割羽織を着し、仙台平の袴、黒手の黄八丈の小袖を着、四分一拵えの大小、寒いから黒縮緬の頭巾を冠り、紺足袋日勤草履と云う行装の立派なお武士、番太郎の店へ立ち、

武「これ此処に有る紙を一帖呉れんか」

喜「へいお入来なさいまし是は何うも御免なさいまし、誠に有難う、其処に札が附いてます、一帖幾らとして有りますへい半紙は二十四文で、駿河半紙は十六文、メンチは十個で八文でげす、藁草履は私の処が一番安いのでございます、有難う誠に何うも、其処へ行くんですが、ちよいと錢を箱の中へ放り込んで一帖持つて行つて下さいまし、札が附いてますから間違えは有りません」

武「なに貴様は余程酒が嗜きだな、私が此処を通る度に飲んで居らん事はないが、貴様は余程酒家だのう」

喜「ハイ嗜きです、お寒くなると朝から酒を飲まねえと気が済みませんな」

武「酒家は妙なものだな、酒屋の前を通つてぷーんと酒の香が致すと飲み度くなる、私  
も同じく極嗜だが、貴様が飲んで居る処を見ると何となく羨しくなる」

喜「え、殿様もお嗜きで、極好い酒が有ります、私やア番太郎ですが江戸ツ子の番太郎  
は余り無えんです、極好い酒が有りますから、誠に失礼ですが一つ召上れ」

武「それは辱いなア」

梅「あらまア御免遊ばせ酔つて居りますから、お前さん何と云う事だよ、お武家様を番  
太郎の家などへお上げ申す事が出来ずものかね」

喜「いや嗜きじやア堪らねえ、ねエ殿様、此方へお上んなさい、長い刀を一本半分差し  
て斯ういう家に上ると身体を横にしなければ這入れませんよ」

武「是は御家内か、私も酒が嗜きでな、此処を通る度に御亭主が飲んで居る、今一寸  
買物をして見ると矢張飲んで居て羨しく遂やる気になりました」

梅「でも汚ない此んな狭い処へ」

喜「宜いから黙つてろ、殿様此女の里は白銀町の白旗稲荷の神主の娘ですが、何  
うしたんだか、亭主思いで、私が酒を飲んで世話を焼かせますが、能く面倒を見ます」

梅「お止しよ」

武「では一盃戴こうか」

喜「お酌をして上げな、大きい盃で」

武「これは御内儀痛み入りますな、お酌で」

梅「誠に何うも召上る物が有りませんで」

武「いや心配してはいかん、却つて是が宜しい成程は何うも余程好い酒を飲むな」

喜「え、四方で、彼家では好い酒を売ります、和泉町では彼家ばかりで、番頭が私を

知つてるので、私が買いに行くのと長谷川町の番太が来たつて別に調合を仕ないで、一本

生の鬼殺しを呉れますが、酒は自慢で」

武「うむ是は堪らん、では近附の為に一盃」

と喜助に差しました。喜助は頭を下げ。

喜「へー有難う、おいお梅此処へ来い酌をして呉れ手前は己に能く酒を飲むな〜てえ

が立派なお武家様がこんな汚い家へ這入つて来て番太郎と酒を飲み、殿様のお盃を私が

飲んで其の猪口を洗ぐのは水臭いつて殿様が直に召上ると云うのは酒の徳だ」

武「酒には上下の差別をしてはいけない」



喜「洒落<sup>しゃれ</sup>た好い殿様だ、何卒<sup>どうぞ</sup>毎日来て下さいまし、殿様私<sup>わっち</sup>の爲めには大切のお店の番頭が私を鼻<sup>はな</sup>で去年の暮に塩辛を呉れましたが、好い鯛の塩辛で、それと一緒に雲丹<sup>うに</sup>を貰ったんですが、女房<sup>か、あ</sup>は雲丹をしらねえもんだから、鬼を喰うと間違えました、是は<sup>からすみ</sup>」

武「是は何うも皆酒家<sup>みんきやのみ</sup>の喰う物ばかりで」

梅「何かお肴を」

喜「鰻でも然<sup>そ</sup>う云つて来ねえよ」

梅「上<sup>あが</sup>るかえ」

喜「上つても上らなくつても宜<sup>い</sup>い、鯛<sup>どじょう</sup>の抜きを、大急ぎで然<sup>そ</sup>う云つて来や、冷飯草履<sup>れいはんそうり</sup>を穿<sup>は</sup>いて往<sup>い</sup>け殿様彼<sup>あれ</sup>は年は二十三ですが、器量<sup>きりょう</sup>が好<sup>よ</sup>うございましょう、幾ら器量<sup>きりょう</sup>が好<sup>よ</sup>くたつて了<sup>は</sup>簡<sup>かん</sup>が悪<sup>わる</sup>くつちやア仕様が無<sup>ね</sup>えが、良<sup>よ</sup>い了<sup>は</sup>簡<sup>かん</sup>で私<sup>わっち</sup>を可愛<sup>かわい</sup>がりますよ」

武「是は恐入<sup>おそ</sup>った、馳走<sup>ちしゅう</sup>に成るからお前のうけも聞かなければならんが、貴様は酒が嗜<sup>しや</sup>きだと云う処から初めて私<sup>わし</sup>が来て馳走<sup>ちしゅう</sup>に成り放<sup>はな</sup>しでは済まんから、少し譲<sup>や</sup>り難<sup>がた</sup>い物を遣<sup>や</sup>るか、是は容易<sup>いそ</sup>に得難<sup>がた</sup>い酪酒<sup>かすけ</sup>で有る、何<sup>い</sup>れで出来るか其<sup>そ</sup>処<sup>こ</sup>は聞<sup>き</sup>かんが、是は何か京都の大内から將軍家へ参<sup>ま</sup>つて、將軍家から御三家御三卿方へ下<sup>くだ</sup>されに成<sup>な</sup>つて、たしない事<sup>こと</sup>で有るから其の又家来共<sup>またけらいども</sup>に少しずつ之<sup>これ</sup>を頂戴<sup>ていだい</sup>致<sup>いた</sup>させるんだが、何<sup>い</sup>うも利<sup>き</sup>き目が違<sup>ちが</sup>つて、其の酒<sup>しゅ</sup>の

中へぼつちり、たらりと落して、一合の中へ猪口に四半分もポタリと落してやると何とも云えん味のものだ、飲む氣が有るなら遣ろうか」

喜「是は何うも、何ですかえ…夫は有難うございます…此盃へ何卒…是は何うも頂く物は、えへへ、大きな物へ」

武「余り大きな物へ入れちやア困る、徳利が小さいから、これへ入れてやろう」

風呂敷を解いて小さい徳利を取出して、栓の堅いのを抜きまして、首を横にしてタラ／＼と彼是れ茶碗に半分程入れて、

武「実は私も親類共へ些と遣り度いと思つて提げて来たのだが、馳走に成つて何も礼に遣る物がないから」

喜「有難う存じます、お、お梅、行つて来たか」

梅「あ、行つて来たよ」

喜「今な、禁裏さまや公方様が喰つて、丁寧な事ア云えねえが、御三家御三卿が喰う酒で番太郎風情が戴ける物じやねえんだが、殿様が遣ると仰しやつて戴いた」

梅「夫はまあ有難い事で、何もございませんが、召上るか召上らないか存じませんが、只今鱒の拔を云い付けて参りましたから」

武「何も構つて呉れちやア困る」

喜「宜いから彼方へ行つてろ、夫から香物の好いのを出しな」

武「夫を直接に飲んではいけない、何んな酒家でも直接にはやれない」

喜「なに旦那私は泡盛でも焼酎でもやります」

とグイと一口飲みました。

武「此奴ア気強い」

喜「ム、是は何うも酷いな、此奴ア、ム、脳天迄滲みるような塩梅で」

武「なか／＼えらいな、それを二夕口と飲む者はないよ」

喜「なに二夕口、訳アございません、薩摩の泡盛だつて何んでもない、ムム」

梅「何う仕たんだよ」

喜「なに宜いよ、ム、ム大変だ、頭が割れるような酷いもので、此奴を公方様が喰うか

ね」

武「酒を割つてやらんければいかん、残りは大切に取つて置きな」

喜「へエお梅是を何処かへ入れて置きな」

武「ポツチリ酒に割つて飲むのだ、私は少し取急ぐで、是を親類共に持つて行つてやら

んければならん、又此の頃に来る」

喜「只今抜きが直じきに参りますが：左様ですか：御迷惑で、誠に失礼を致して恐入りま  
す」

武「大きに厄介で有った、御家内誠に世話に成りました」

と丁寧にお武家が家内にも挨拶をして落着き払って、チャラリく雪駄せつたを穿はいて行く後  
影しろかげを木戸の処を曲るまで見送って、

喜「有難うございました、どうぞ殿様此の後のちも寄ってお呉んなさい、へえへえ有難う、  
おい嬢かア、大切に取たいせつって置きな、御三家御三卿くわが喰くらうてえんだが、旨なんともも何共なんともねえもの  
を飲のむんだな、香の物の好いいを出いして呉れ、酒家しゅかは沢山たんの着きは要いらない、香の物の好い  
のが有ればそれで沢山だ、併しかし酷ひどい酒を飲のせやアがつたなあ、痛いたえ、変な酒だな、おいお  
梅ちよつと一寸来て呉んな、ウ、ウ、腹はらが痛いたえから一寸来て呉れ」

梅「極ごくりを云いってるよ、お前飲すぎみ過すぎだよ、疝せん癩しやくに障さるんだよ」

喜「彼あン畜生ちくせい変な物を飲のましやアがつて、横よこッ腹はらを扶たするように、鳩尾骨みぞおちを穿ほるような、  
ウ、あ、痛いたえ」

梅「何なにうしたんだよ」

喜「ア、痛え、ア痛たゝゝ、お、お梅、脊中を押して呉れ、脊中じゃアねえ、肩の処を横ッ腹を」

梅「何処だよ」

喜「其処じゃアねえ、此方の足の爪先だ、膝だ、あゝ肩だ」

ともがいて居ます、恐ろしいもので、節々々の痛みが夥しく毛穴が弥立つて、五臓六腑悩乱致し、ウーンと立上るから女房は驚いて居ると、喜助は苦しみながら台所へ這い出してガーと血の塊を吐いて身を震わして居る。お梅は恟りして、

梅「家の良人が何うか為ましたから誰方か来て下さいよう、總助さんく」

總「何うしたく、きまりだ、吐血だ、だから酒を飲んじやア宜かねえと云うのだ、何う云うものだこれ喜助確りしろ、喜助く」

喜「ウーン」

それなりに相成りました。

總「何う云う訳だ」

と云うとお梅は涙ながら、これく斯う云う訳で御酒を割って飲まなければ宜けないと云うのを家の良人が直接に飲みましたから身体に障ったのでございませう。

總「夫は怪しからん事だ、何しても御検視を願わなければならん」

と云うので、御検視到来に相成りお医者も立会つて調べると、是は全く酒の毒だが、尋常の死にはない、余程効能の強い毒酒ではないかと、依田豊前守様の白洲へ持出したが御奉行が其の酒を段々お調べに成り、医者を立会して見ると、一ト通りならん処の毒薬で、何でも是は大名旗下の中に謀叛之れ有る者、お家を覆さんとする者が、毒酒を試しに來たに相違ないと云うので、女房に其の武家の顔を知つて居るか尋ねると、これ／＼斯う云う姿の武家体と申し上げたので、人相書を作り八方十方へお手配りに成り箱根の前まで手が廻る事に成つたが、知れません。お梅は貞節な婦人ゆえ泣いてばかり居ります。里方で引取ろうと云うと、

梅「私はお願いだから、あの武士が毒を試しに來て、始めから何うも様子が訝しいと思つたが、顔を知つて居るのは私ばかり、此の長谷川町を再び通る氣遣いは有るまいから、人の盛る処へ行つてあの侍を見付けて、亭主の敵を強いお上に取つて貰わなければならぬから、何うぞ私を吉原へ女郎に売つて下さい、格子先へ立つ人の中にあの武家に似た人が有つたら騙して捕まえて亭主の敵を討つ」

と云い張り、幾ら留めても肯かず遂に江戸町一丁目辨天屋の抱えと成つて名を紅

梅と改め、彼の武士の行方を探すと云う亭主の敵討の端緒でございます。

## 二

今日の処は、長谷川町の番人喜助の続きとお話が一途に分れますが、後に一つ道に成る其の前文でありますからお聴き悪い事でございましょう、扱築地の本郷町と小田原町、柳原町と町内が繋がって居りますが、小田原町の家主に金兵衛と申す者がございまして、其の頃は家号を申して近江屋の金兵衛と云う処から近金と云われます、年齢は四十二に成りますが、真実な人で、女房をお蓮と云って三十八に成ります、家主の内儀さんは随分権式ぶつたものでございまして至って気さくなお喋りのお内儀さんで、夫婦寄ると子が無いので其の噂ばかりして居ります。

蓮「旦那えく、もう何うも何んですね、夫婦の中に子の無い位心細いものは無いと思つて居ます、お互に年齢を取つて、来年はお前さんは四十三だよ」

金「年齢の事を云うと心細くなるから其んな事を云うな」

蓮「だつてさ、夫婦養子をしても気心の知れない者に気兼ねをするのも厭だし、五人組の

安兵衛さんなどは、無い子では泣きを見ないから寧ろその無い方が宜いと云う側から子が出来て、今度ので十二人だてえます」

金「あの人は子福者だのう」

蓮「其の癖お内儀さんは瘦ぎすで子は無さそうなのに」

金「お前などはポツチャリ肥満つて、お尻も大きいから子は出来そうだが」

蓮「授かりものですね、子がなければ夫婦養子を仕なければ成りませんが、夫婦養子と云うよりも私の考えじやア一人娘を貰つて置いて、お前様には甥だが竹次郎を宅へ入れる積りですが、当人が厭だと云うかも知れませんが、お前様の血統だから是非此の家を継げるより仕方は無いが、嫁が悪いといけないよ、それが本当の子で無いから私が心細いよ、お前さんには身内だから竹は宜いが嫁の根性が悪いと竹さんまで嫁に捲れて仕舞つて、訝しな了簡に成つて親不孝をされた日にア大変だよ、お前さんが長生きをしてお呉んなされば宜いが若し眼でも眠つた後は大変だよ、だから嫁の宜いのが欲しいね」

金「欲しいたつて無いよ、縁ぞくだから」

蓮「裏に居る売卜者の浪人の娘は好い器量だね」

金「うむ、彼は何うも無いのう、品格と云い、親孝行でな、彼の娘に味噌漉を提げさせ



るのは惜しいものだ、お父さんはヨボくしてえるがまだ其んなに取る年でもないようだが、寒さ橋の側へ占いに出るのだが可哀想だのう」

蓮「あの娘を貰い度いもんだね」

金「貰い度いたつて先方も一人娘だから」

蓮「其処を工夫してさ」

金「工夫たつて一人子だから呉れないよ」

蓮「私に宜い工夫が有るんです、先方は大変に困つて居る様子だから、可愛がつて店賃を負けておやんなさいよ」

金「店賃を負けるてえ訳にはいかない、地主へ遣らなくつちやアならないから」

蓮「成る丈け催促をしないようにおしなさい」

金「催促するのも、少しは遠慮をして居るのよ」

蓮「彼んな親孝行な娘は有りませんね、浪人ぐるみ引取つても構やアしない」

金「親付きでか」

蓮「親付きだつて、あの浪人者なら宜いよ、あの浪人者を呼んで、お前さんね、親一人子一人だが、良い子を持つてお任せだ、どうせ宅へ養子をするのだが、甥の竹と云う者

が奉公先から下つて来れば宅の養子に成る身の上だが、彼に添わしたいように思うが、お前様も一人子だから他へ呉れる理由にも行くまいから、一緒こたにお成んなさいと云つて御覧なさい」

金「馬鹿ア云え、そんな事が云えるものか、あの浪人は堅い男だ、毎朝板の間へ手を突いて、お早うと丁寧に厳格した人だが、そんな篋棒な事を頭を禿らかして云えるものか」

蓮「じゃア斯う仕ましよう宅へみいちゃんだのおしげさんだのが綿摘みの稽古に来ますから、あの娘にも綿を摘む内職を成さいと云つて呼寄せ様じゃアありませんか、幸いすうちゃんが休んで桶が明いてるから」

金「あゝ云う遠慮深い人だから身装があを通りだからって寄越すめえ」

蓮「それは此方で貸して手間で差引くといつて悉皆り私の物を貸して遣つて習いに来ればもう占めたもので、内職が出来ても出来なくても、あの娘のは光沢がよくって評判が宜い、是丈揚つたつて手習丈の物はなくても宜いから無闇に手間賃を出してお遣んなさいよ」

金「夫は大変な散財だな」

蓮「夫から段々覚えて来たから前貸だと氣を付けてお金子を貸してやって、ホイ〜云つて子の様に可愛がつて遣つてお父さんが留守の内は私の側に置いて娘のようにして可愛がつて、段々馴染が深く成るうち一年が二年と年月がたつ内に、三年経つと竹が年期が明いて来ますから、丁度宜いねえ二人差向いに成つたら氣を利かしてお外しなさいよ、私はお参りに行くよ、二人置いて行けば、冬なら炬燵が有るから当人同志で旨く成つて仕舞い、当人が来たいと云えば宜いじやアないか」

金「夫じやア無理無体にか、併しあの浪人は堅いから寄越すか知らん、お、噂をすれば影だ、ピー〜風でさむさ橋に出て居ても、見て貰い人もないかしてもう帰つて来た、帰り際に早いから屹度寄るぜ」

浪「え、御免を」

金「はい」

浪「留守中誠に有難う存じました、え、只今帰りました、清左衛門で」

金「まア一寸お上んなさいよ」

蓮「ちよいとお這入んなさい」

浪「はい御免を、誠に何うも両三日は引続いてお寒い事で、併しながら何日も御壯

健やな事ことで」

金「其んな堅い事を云わないでも宜よろしい、お茶を煎いれて羊羹ようかんでも切んなさい、なに無く成つたえ、何か切んなよ」

蓮「切んなつて切るものは無いよ」

金「じゃア最中もなかでも出でしなよ」

浪「え、御内室ごないしつ様私わたくしが出来ますと娘一人を残しまして一日留守に致し何かと御厄介勝それで、夫それにお隣の麴屋のお内儀かみさんが誠に御真実になすつて一通りならんお目をお懸け下され誠に有難い事でございます、お礼にも都度つどく上り度あがとう存じますが何分貧乏暇なしで遂つ々いく御無沙汰勝いに相成つて済みません」

金「其んな堅い事には及びません、裏の方の屋根が少し損じたから其の内に修繕なさせます、お前さんは能く毎日寒さ橋へお出でなさる、此の寒いのに名さえ寒さ橋てえんだから嘸さぞお寒かろう、ピュー〜風で、貴公あなたはお幾歳いくつです」

清「いえ何どうも誠に多病の人間で、大きに病魔やまいの爲ために老けて見られますんですが、未だ四十六歳で」

金「御壯ごさかんですな」

浪「いえ甚く弱むしに成りまして困ります、貴方は何日も御壯健ですな」

金「マお茶をお喫んなさい」

清「是は有難う存じます、頂戴致します、結構なお茶で、手前は茶が嗜で素より酒が嫌いだから、好い菓子も買えません、斯くの如く困窮零落しては菓子も喫べられません、斯様な結構なお茶、結構なお菓子を、イエ〜是は戴きますまい是は娘に持つて行つて遣わしましょう」

金「今お前様処のお嬢さんのお噂をして居たのだが、実に私は鼻が高い、私の長屋にあゝ云う親孝行の娘が居れば私は何の位鼻が高いか知れない、お前さんはお合せだと云つてお噂ばかりして居ます、お前さんが留守でも隙間なく働いて、長屋の評判も好し、ちよいと宅へ来ても水を汲みましようか、買ひ物はありませんかといつて気を付けてお呉れで、御品格と云い、御器量と云い実に申し分が有りませんね」

清「イエ何う致しまして誠に不束者で、屋敷育ちで頓と町家の住居を致した事がないので様子合を一向に心得ませんから皆様に行届勝ちで、夫に一体無口で」

金「イエ余りペラ〜喋るのは宜けません、年の行かん娘などがお世辞を云うのはいかんもので、今ね其の家内がお噂をして居ましたので、お宅で何か内職でもおさせですかえ」

清「イエ恥入ります、碌な事も出来ませんが少々ばかり鼻緒を縫ったり致して居ります」  
金「鼻緒も宜うございませうが、家内が綿を紡むことを覚えて近所の娘子に教えるので、恵比壽屋だの、布袋屋だの、通り四丁目の棒大や何かから頼まれてお店の仕事ばかり為ますが余程宜い手間で、立派な男の手間位には成ります、処が此の節おすみと云う娘が休んでて桶が明いてますから、教えて上げ度いが、甚だ失礼で何うしたら宜かろうなんて、家内が云いますから、なに失礼な訳は無い、覚えてお父さんのお手助けに成れば結構だ、鼻緒を縫ってお在でようだが、夫も時々休みが有るようだ、夫から見れば是は毎日の仕事だから少しはお父さんのお手助けに成るかも知れんと考えたんで」  
清「夫は御親切に有難い事で、実は娘も好い内職を皆さんが御当家へ来て成さるが、何うかして私もあゝいう内職を覚え度いと申して居りますが、何分立派なお嬢さん方の入らつしやる中へ」

蓮「いえそんな事を心配してはいけません、尤も宅へ参る娘達は可なりの処の娘ですから其の中へ這入るのだからとお思いなさるのは御尤ですが、私の着物が明いてますから、碌なのじゃありません私が若い時分に着たので、今は入りませんから上げちまつても宜いが、失礼ですからお貸し申します、其の内に手間が取れゝば又拵えて上げるように

為しますが、是は若い時分に締めた帯で、宅には娘はなし、親類にも女の児こがないから取つて置いてても仕様が有りませんから」

金「何か上げなよ、失礼だが半纏はんでんを、誠に失礼で御立腹か知らんが襦袢じゆばんなども上げなよ」

蓮「どうぞ不用なのでですから、赤いのも今は土器色かわらけいろに成つたんです」

金「細帯も附けて上げなよ」

清「是は何うも恐れ入ります、残らず拝借致しても他の物と違ひまして、瀬戸物や塗物は瑾きずを付けた位で済みますが、着類きるいは着れば切れるもので」

金「宜しい切れても、仕舞つて置いたつて折切れおりきます、誰たれにも遣る者はなし詰らんわけだから着せて下さい、綺麗な身装なりをして出入りではいをして下されば私も鼻が高い、今だつて汚くも何なんともない、私の綿入羽織わたいりが有つたろう、お前さんの身装けなすを軽蔑けんべつんじやアございませんが是は古くつて一旦染そめたんで、一寸余所ちよつとよそへ行く時に之を着て出て下さると私は鼻が高い、然そうして姉ねえさんは是非寄越して下さいよ」

清「是は何なんとも共何どうも御親切千万有難う、親子の者が窮して居りますのを蔭ながら御心配下され、着物がなければ貸して遣らうと仰しやる思おぼしめ召し、千万辱かたじけない事で、御親切は

無にいたしません、然らば拝借を願います」

蓮「姉さんを屹度お寄越しなさいよ」

清「何のようにも是は願わなければ成りません、筆も嘸ぞ悦びましょう」

金「お筆さんと云いますか、私は始めてお名を覚えましたが宜しく」

清「左様なら拝借を致します」

と清左衛門悉く悦んで、ニコ／＼しながら家に帰つて来ました、娘お筆は、寒さの取附だと云うにまだ綿の入った着物が思うように質受が出来ず、袷に前掛だけで短い半纏に幅の狭い帯を締ってお筆は頻に働いて居ります。

筆「おやお帰り遊ばせ」

清「今日は風が吹くんで往来も繁くないから早く帰つて来た」

筆「私がお迎いにしようと思つて居りました処で、大層にこ／＼笑つて在つしやいますね」

清「お家主さんが御親切に色々仰しやつて下さり、それにあのお内儀さんは綿を紡む内職が名人だそうで近所の娘達も稽古に来るからお前も遣したら宜かろうと、色々と御親切に仰しやつて衣類まで貸して下さい、此の通り私に綿入羽織にしると被仰つてこれを



貸して下すつた実に御親切な事で恐入つた訳で、あだ仇に思つては成りませんが、実に仕合せな事で、ど何うか一生懸命に覚えて呉れるかね」

筆「お父様とうさま、私は一生懸命に神信心をして上手に成つてお父様のお手助けをいたし度とうございませうから御心配なく、来年の夏迄にはきつと屹度一人前に成りますから」

清「然そう早くも覚えられまいが其の心得で居れば宜よい」

と直すぐに貰つた着物を着せて礼に遣ると此方こちうは嫁に仕様と思うのでございませうから、ちやほや致し是から綿紡みを教えまして出来ても出来なくても、あゝ能く出来た、お前のはお店たなの受けが好よい是は光沢つやが別だと云うので手間を先へ貸して呉れるように致して万事に氣をつけて呉れるから大仕合せで、其の内暮になると何か手伝いをして遣り度たいと思つて居る処へ清左衛門が礼に参りました。

清「エ、御免を蒙こうむります」

金「おやお出いでなさい斯こうなつて近ちか々、お出でになるに、然そうお前さんの様に窮屈きうくつで悪わるくつては困くるる」

清「何うも私は武骨者で困ります、段々とお世話様に相成なり何共お礼の申し上げようが有りませぬ、先せん達だつては又出来もせんものに、前まえ以てお給金を頂戴致し、中々今からお

手間などを戴けるわけのものでは有りません」

蓮「なアにお前さん何日でも旦那と噂をして居るの、大層お店の受けが宜い事、ちよいとお前さん早くお出しなさいよ」

金「あれはね其のどうせ来年の三月迄の手間賃で、私が上げる訳じゃアない、店から来たんだから遠慮をしてはいけない、是はね私の心許りのお歳暮でお筆さんに上げます、家内がお年玉をつて、今から年玉を上げるのも可笑しいが、どうせ上げる物だからお歳暮と一緒に預かつて置いて下さい」

清「是は何うも暮の二十八日にお年玉を、是は千万辱ない事で」

蓮「それから正月のうちはね、女子供は皆美しい身装をして来るから、貴方もお筆さんに着せ度くお思いでしょう、また追々春の手間で差引きますが、年頃の娘の事ですから皆の身装を見たら羨しくも思いなさろう、仮令其様な気がないにもせよ、お筆さんばかり悪い身装をして来る訳にもいきませんまい、是は台なしに成つて今は不粹ですが、荒つぽい小紋が有るんです、好いんじゃないんですが、お筆さんは人柄だけに小紋の紋付はお似合いだらうと思つて、仕立屋へ遣つたんではないので、家で縫つたんですよ、夫に帯は紫縹子が宜かろうと、斯う云う訳で、赤い物が交つて気に入らないかも知れないが、朱

の紋縮緬もんちりめんと腹合せにしてほんのチヨク／＼着るように、此の前掛は古いのですが、二度ばかりつきやア締めないんで、此の簪かんざしは私が若い時分に買ったんですが、丸まるまげ鬘まげには差せないから、不粋やぼなもんですが…」

金「貴方にお歳暮に羽織を上げましょう」

清「是は何うも斯うは戴けません、其んなに無闇と然そう下さる訳のものではない、又人様に無闇と戴くべき道理がない、然う御鼻屑かえ下さいますと却かえつて褪さめるもので、何うか末長く幾久しく」

金「其んな堅い事を云わずに取つてお置きなさい、只上げやアしません、後で差引きますよ」

清「こんなは何うも何なんと共ハヤ千万有難う、親子の者が助かります、彼あれは誠に孝行致して呉れ、親思いでワク／＼致して呉れますが、才はたらき覚はたらきの無い親を持って不便ふびんとは思いますが、何一つ買つて与える事も出来ませんが御ご当ち家らへ内職あがに上るようになつてから、結構な櫛くしを戴いたり、食物たべものまで贈つて下さり、何なんたる御ご真ま実じつの事か実に何どうも此の御恩は決して忘却は致しません、千万辱ない事では難う、折角の思召ゆえ当季拝借致しましょう」

と悦んで包みに致し小脇たぐに抱えて宅たくへ帰つて話すと娘は飛立つ程の嬉しき、是から僅わずかな

物を持つて娘が礼に参るような事で、其の年も果て、宝曆三年となりましたが、職を致す者は大概正月廿日迄は休みますので、此の金兵衛の宅の内職も十七日迄休みでございませう、丁度六日お年越しの朝早く起きて金兵衛は近辺に年始に出ました、此方はお筆が昼飯を喰べましたから、かねて近金から貰った小紋の紋付に紫縷子の帯を締めて出ると一際目立つ別嬪でございませう、時々金兵衛の家内とお湯に行きますから誘いました。

筆「お内儀さんお湯に入つしやるならお供を致しましょう」

蓮「私は今御年始客が有るから先へ行つてお呉れ、直に後から行くから、柳原町のお湯だろうね」

筆「はい」

娘は一人でお湯に参りましたのが一つのお話になりますことで、お筆がそこへ湯から上りましたがまだお内儀さんが来るようすがない、何か御用が出来てお手間が取れるのか、お迎いに行こうかと、手拭を小桶で絞つて居ると、最前から板の間で身体を洗つて居た婆さんは、年の頃六十四五で、頭の中央が皿のように禿げて居り、本郷町の桂庵のお虎と云うもので、

虎「ちよいと姉さん、待つてお呉れよ……おい姉さん」

筆「はい」

虎「お前ね、今此処こゝに居る人は一人か二人しか居ないよ、小紋の紋付に紫縷子の帯を締めて良い処とこのお嬢さんのふりをして、大胆な女じやアないか人の金入かねいれを取りやアがつて、あの中着にやア金は沢山たんと入つてやアしないよ、三兩一步入つての、此方こつちへ返えせ、此のめえも此方ア銘仙の半纏なまぬが失つてらア、疾とうから眼を注つけて居たんだ、近所こつちで毎度顔を見て知つてるぞ、左の袂たもとに入つてるから出しなよ、何なんだ利いた風な阿魔女あまつちよだ」

と口穢くちぎたなく罵のゝしるのを此方こちらは何を云われても只おどくして居ると、お虎婆おとばアは無闇むげんに來てお筆の袂から中着を引出して、

虎「それ見やアがれ此の通りだ、此の阿魔女あまめ」

と小桶を取つて投ほうり付けると小鬢こびんに中あたつて血が出る。娘むすめだけに他ほかが大騒おどろぎで、

番「外へ立たつちやアいけません、板の間稼いかりぎでも何でもない物の間違まちがいでげす」

と云つて居る所へ、人を搔か分けて近江屋金兵衛おんえが参り、

金「何だく」

番「是は大屋さん入いらつしやいまし、相手は帰かりましたが、本郷町の桂庵婆ばあのお虎とらてえいけない奴やつで」

金「何か取つたのか」

番「婆アが取つたんじゃア有りませんが、貴方の店子で、それ浪人で売トに出る人が有りましょう」

金「ア、ア」

番「あの綺麗な娘が有りますな」

金「ア、お筆さんと云うのだが、何だえ、何う云う間違ひなんです」

番「婆アが云いますには嬢さんが巾着を取つたつて、嬢様が着物を着て了い、手拭を絞つてる所へ婆アが板の間から飛んで来て嬢さんの袂へ手を入れると、入り込んだのでぐも有りますか巾着が出ましたお嬢様が他人の物を取るようなお子様じゃア有りませんが」

金「なにー、箆棒めえ、貴様は何だ」

番「湯屋の番頭で」

金「何だつて番をして居るのだよ」

番「番はして居ましたが、袂から巾着が出たので」

金「出たつて他人の物を取るようなお筆さんじゃアねえのに、そんな悪名を付けられて堪るものか、己の店子に間違ひが有つちやア此の儘に捨置かれねえ、何処までも詮議

を為しなけりやアならねえ、他ほかの事とは違ちがう、婆ばあアは何処どこに居いる、姉あねさんは何処どこに居いる」  
 番「お虎婆こねアは先刻さつき歸かえりましたが、何なんでも是こゝは姉あねさんに恨うらみが有あつて仕した事ことでしょう、姉あねさんは間まが悪いとでも思おもつたか、裏口うらぐちから駈かけ出した限かぎり行方ゆくまゝが知しれませぬ」

金「夫それは大變おそろだ」

と汗あせをダク／＼かいて宅たくへ歸かえつて参まゐり、

金「おい／＼何故ゆゑお前めえお筆ふでさんと一いっ緒しょに湯ゆに行いかねえんだ」

蓮「だつて尾張町おとぎの夫婦夫婦が子供こどもを連つれて来きて漸ようやく歸かえして仕舞し舞まうと又また彌兵衛やへえさんが来きたの  
 だもの」

金「今本郷町いまほんごうの桂庵婆けいあんばあアがお筆ふでさんに泥棒どろぼうをしたつて悪あく名なを附つけやアがつた」

蓮「お前めえさん黙もくつて居いたかえ」

金「己おれは跡あとから行いつたのだから様子ようすが分わらねえ」

蓮「お前めえさん何なんの為ために行いつたんだねえ」

金「知らずに行いつたのよ、板いたの間まだと云いう騒さわぎなんだがお前めえさえ附ついて行いけば其そのんな事こと  
 ア有ありアしねえんだ」

蓮「私わたしは宅うちの片付け物かたづけものをして居いらアねお前めえさんこそブラ／＼遊あそんでばかり居いる癖くせに」

金「遊んでやアしない、己が今湯屋の前を通り掛ると人が立って居るから、何うしたんだてえと、浪人者の姉さんがなコレく〜てえから慌て、帰つて来た：お、清左衛門さんか、此方へお這入り、大變な事が出来た」

清「へえー何う云うお間違いで」

金「今家内に小言を云つてる処ですが、お筆さんと湯へ行く約束をしてお筆さんが誘つて下さると、丁度客が来て居たもんですから、お筆さん一人で柳原町の湯へ行くと、本郷町の桂庵の婆ア、意地の悪そうな奴で妾の周旋しゅうせんをしたり何かしていけない奴です、其奴がお筆さんに己の巾着を取つたつて、板の間から直すぐに上あがつて来てお筆さんの袂へ手を突ツ込んでお筆さんの袂から巾着を引出すと、僅かな金でも…：腹たっア立ちやアいけない、取つたと云うのではない、是には何か理由いりわけの有る事だろうと思うが、今帰つて、家内これへ厳やかましく小言を申して居る処で、お筆さんを奥へ連れてつてなだめて居る内に、お筆さんが居なくなつたのだが、桂庵婆アに突つきあわ合あして掛合つぎあえば何うでもなるが、何ういう理由わけだか薩さつぱ張理由りが分らねえ、恨を受けるような事は有りやアしませんか、姉さんは他人ひとに憎まれるような事は有るまいと思うが何か有りませんか」

清「何処どこへ参りました」



金「何処へ行つたか分りません、世間へ対して面目なくお前さんに叱られると思つて何処かへ行つたのでしよう」

清「はい私は斯く零落を致して裏家住いはして居つても人様の物を一厘一毛でも掠めるような根性は有りません、殊に御家様から多分に此の春は戴き物をして何一つ不足なく餅も搗き明日は七草粥でも祝おうと存じて居ましたに、人様の物を取りますなんて」

金「取つたか取らないか未だ分らない、なにお筆さんが人の物を取る訳はないが、お前さん何か本郷町の桂庵の婆アに恨を受けるような覚えは有りませんか」

清「桂庵の婆ア、あの何ですか、色の黒い肥満ました…」

金「左様」

清「あの豊<sup>でつぷり</sup>胖<sup>ふとり</sup>肥満ました、頭の禿<sup>はげ</sup>た」

金「左様」

清「うゝむ、あの婆ア」

金「ほら何か有るに違えねえんだ」

清「昨年わきの十月頃から再度参り、お前の処の娘を他で欲しがる番頭とか旦那とか有るか  
ら世話を致そうと申しますが、私取合いませんでした、すると昨年の暮廿九日に又私方へ

参りまして、三十金並べまして、お前さんはお堅いけれ共三十金は容易い金じゃアない、殊に暮ゆえ百金にも向うじゃアないか、此の金を取つてお嬢さんを他家の妾にしなさればお前さんの為めになる、悪い事は勧めないと申しますから、私は立腹致して、不埒至極な婆だ、仮令浪人しても武士だ、一人の娘を見苦しい目掛手掛に遣れるものか、何と心得て居る、そんな事を云わずにと申して又金を出しましたから、私は立腹の余り婆の胸倉を捕つて戸外へ突出して、二度と再び参る事はならんと云つて、唾を横ツ面へ吐ツ掛けて遣わしました」

金「それだ、何しろ嬢さんの行きそうな処は有りませんか」

清「左様、何処と云つて尋ねて参る処も有りませんが、小日向水道町に今井玄秀と申す医者があります、其の娘と手習朋輩で前々懇意に致した事が有りますが、手紙の贈答を致すと云う事を聴いて居りましたが夫へは多分参りますまいと思ひます」

金「だから何処か行きそうな処は有りませんか」

清「中番町で外村金右衛門と云う是はその直参と申しても小普請で居ります、母方の縁類と云う訳でも何でも有りませんが極別懇に致しまして、両度程連れて行きました夫へは多分参りますまい」

金「だから何処か行きそうな処は有りませんか」

清「谷中日暮やなかひぐらしに瑞応山ずいおうざん南泉寺なんせんじと云う寺が有ります、夫に宮内健次郎みやのうちけんじろうと云う者

が居ますが、夫へは多分参りますまい」

金「行かない処ばかり云つては困る」

清左衛門は唯おどくして何処を探そうと云う目途めあてもなく心配致して居ります。

翌よくちよ

朝あさに成つて、

金「清左衛門さん私の家わしうちへお出いでなさい、一緒に七草粥を祝おうじゃアないか」

と云うので是から諸方へ手分けをして迷子を捜し大川筋を尋ねさせましたが知れませんが、今七草粥を祝おうと箸を取つて、喰たべに掛ると表をバラバラ人が通り、

○「何どうしたく」

□「浪除杭なみよけくいに打付ぶつつかった溺死どぎえもん人は娘の土左衛門で小紋の紋付を着て紫縷子の腹合せの帯を締めて居る、好いい女だが菰こもを船子ふなこが掛けてやった」

△「行つて見ろく」

金兵衛も清左衛門も之を聞くと等しく慌て、茶碗と箸もつを持たなりで戸外おもてへ飛出したから見物人は驚きました。

○「何をどんぶりばち并鉢ばちを振廻すのだ」

清「そ其の土左衛門は何処に居ります」

金「旦那土左衛門は何処に居ります」

○「何をし為やアがるんだ、見ねえ、どうもきぢげ氣違えだ、人に飯を打掛ぶつかけて」

金「何なんと心得て居る、町役人ちやうやくにんだぞ、ど何処どこだく」

○「土左衛門へは船子が菰を掛けてやって、ブツカリくあつち彼方へ流れて行きました」

と云われて兩人はきぬけ氣脱きぬけのした様になり箸と茶碗を持ったなりで帰つて来て、

清「はあー娘は面目ないので身を投げたか」

金「いや昨夜ゆうべ飛込んだものが然そう急に浮くう訳のものじゃアない、似た人は世間に幾らも有る、お筆さんはよもや死しんなさりやアしまい、心配なさんな」

清左衛門は実ほんやりに呆然ぼんやりして、娘は盗賊どろぼうの汚名を受けこれを恥かしいと心得て入水じゆすい致した上は最早世たのしに楽たのしみはないと遺書かきおきを認め、家主いえぬしへ重ね／＼の礼状れいじやうでございます、

其の儘浪宅をさまよい出いで諸方を探したが知れん。不ふ凶と氣附いたは高たかなべ奈部の家のめい姪は放蕩無頼の女で、十六位から浮氣心が有つて、只今は女郎ぢやうらうに成つて居ると云う事だが、折々先方から手紙が来て、私わしに知らさんように手紙の贈答やとりをして居つたが、万ひよっと一としたら行き

宜いから左様な処へでも行きはしまいかと、是から吉原へ這入つて彼処此処を探して歩いたが分りません。店先を覗きながら段々来て、江戸町一丁目の辨天屋の前まで来ました。娼「ちよいと喜助どん、あの格子先に立つて居るお客さんに会いたいから、そら覗いて居る人だよ」

喜「えへ、旦那く」

清「はい」

喜「華魁が貴方にお目に掛りたいと仰しやいますんで」

清「左様でございますか、何処へ出ます」

喜「何うか籬の方へお出を願います」

其の内華魁が上草履を穿いて跡尻から廻つて参りますのを見て。

清「お前さんかえ、すっかり忘れてしまった、極年の行かん時分に会つたのだから」

娼妓はいきなり清左衛門の胸倉を固く捕り、声を振立て、

娼「此の武家だよ、私の亭主に毒を飲まして殺した奴は」

清「何をする………」

其の中に若者が多勢にて清左衛門を取押えて大門の番所へ引く事に成りました。

是れから直すぐに町奉行所へ出て、依田豊前守のお調べに成りましたが、此の下河原清左衛門は人違いか、全く彼の毒かを盛さむらいつた武家か、是れは後篇に申し上げることにいたします。

## 三

え、引続きの依田政談で依田豊前守御勤役中には少しお六むすケしい事があると吟味与力に任して置かず直じきく々の御裁断がありまして、先まず重罪なるものは罪を軽かろくいたすようなお情深いお奉行で余程お調べに仁じんけい恵けいがありました事でございます、其の中でも吉田よしだけんもつ監物かんぶつの家の事に付いて豊前守様から曲淵まがりぶちかいのかみ甲斐守かいしゆ様へお引継になり、両奉行の誉ほまれになつたというお話でございます。宝曆の三年下河原清左衛門という浪人者が築地小田原町に裏家住うらけいを致して居る中うちに、家いえぬし主ぬし金兵衛が、娘の孝心から誠に気の毒だということで、目を掛けましたから大きに親子の者も貧苦まぬがしいわいを免れ幸を得て喜んで居る甲斐もなく、翌年宝曆四年正月の六日年越しの晩に娘の行方が知れなくなつたので、父の下河原清左衛門が娘を探しに吉原に懇意に致す婦人が遊女になつて居ると云う話だから、相談をしようとするので、事によつたら娘が懇意に致した婦人があるから、其の遊女の所へ尋ねて往ゆきはしないかと、

吉原へ参つて格子先を覗いて歩くと、辨天屋祐三郎という江戸町一丁目の大籬おおまがきの次位大町小見世だいまちこみせというべき店で、此の家の紅梅やという女が籬まで廻つて呉れというので、娘が居た事と心得て籬へ廻ると、紅梅が下おりて来まして突だしぬけ然に清左衛門の胸倉を取つて、私の亭主に毒酒を盛もつた侍が通つたらば知らせて呉れ、と若い者にも頼んであるから、四五人の若い者が来て左右を取巻き会所へ連行つれゆくというので、清左衛門は会所へ引かれて、是から田町たまちの番屋へ廻され、一通り調べがあつて依田豊前守役宅の砂利の上に坐る様な事になつたから、人という者は災難のあるもので、此の毒酒の事に就つて依田様は余程心配をなすつて居たと見えて、直すくに白洲へお呼よびい出しに相成り、辨天屋の遊女紅梅、祐三郎代だいかや、附添の者が皆出て居ります、清左衛門繩に掛つて御町奉行へ呼出される、依田様は八ツ時の御下城から直に御出席に相成りまして、じつと下河原清左衛門の顔を見て居りましたが、人は見掛けに依らんものと見えて柔和温順の人に悪人があつたり、或あるは人殺しでもしそうな強い顔がん色しよくの者に却かえつて誠の善人がある、解らんものでございますから名御奉行は皆向うの云う事を聞きますに、心に蟠わだかまりがあると言葉に濁りがあるから、目を眠つて裁判を致されたと申しますが、依田様も吟味中は目を眠つて先の云う事を聞かれました。

豊「新吉原町江戸町一丁目辨天屋祐三郎抱え紅梅、祐三郎代かや附添の者まか罷いり出でたか」

かや「皆出でましてございます」

豊「うむ、紅梅何歳に相成る」

紅「はい二十七なんです」

豊「うむ、其の方昨年十一月三日亭主番人喜助に毒酒を盛つたる侍を取押えた由、是なる浪人清左衛門は其の方の夫喜助に毒を盛つたる者に相違ないか」

紅「はい、間違いやアしません、何も女郎になりたい事はありませんので、一生懸命に何うかして亭主の敵が討ちたいと思つて親類の止るのも聞かずに泥水の中に這入り、苦海くがいの中に居ても万ひよつと一して敵を尋ぬる手掛りにもなろうと思つたから、此んな処へ這入つて居るので、察してお呉んなさいよ」

なんと云う。お奉行様は少しお考えで、

豊「夫それに相違ないな」

かや「かやが申し上げますが、もう紅梅が勤めて居りまして皆是々みんなれれだと打明けて話しました、店の若い者や何かに皆頼んでありますから、網を張つて待つて居た処へ、あの侍が来たというので一時いちどときに取押えましたから、まあ容易たやすく繩に掛けて会所へ廻し、此の度たび御奉行様の御厄介に成りましたどうか何分宜しくお願い申します」



豊「うむ、浪人下河原清左衛門」

清「はゝア」

と残念そうな顔をしてずつと首を擡あげました。

豊「其の方は何歳だ」

清「四十九歳に相成ります、へえ…」

豊「昨年十一月三日八ツ半時じふきと申す事じやが、番人喜助方へ参つて小さい徳利とくりを持ち銘酒だと云つて喜助に毒を飲ませたに相違あるまい、真直まつすぐに白状致せ」

清「恐れながら手前毛頭けとう覚えがございません、はい何故なにゆゑに毒を盛りましようか、何等の人違いか、頓と解りません、侍でござる、仮令浪人しても汚名は厭いといます事で、如何にも残念に心得ます、何故斯様かような事を申すか頓と相解りません、神に誓い決して人を毒殺いたすなどゝいは毛頭けとう覚えのない事、御推察下さるるよう」

豊「其の方何様いかように陳じても、是なる遊女紅梅は貞節なる心から致して夫の敵あだが討ちたいばかりで遊女になり、其の侍を取押えて上かみに叵介を掛けても亭主の仇あだを討ちたいという精神から致して漸く尋ね当てた事である、逆も逃とてれる道はない、さア何方いずかたに於て毒薬調合致したか、それを申せ」

清「はい、どうも思い掛けない事で、毒薬調合などというは容易ならん事で、医者としては、仮令君父の命たりとも毒薬調合はせぬのが掟、夫故医者に相成る時は、其の師匠へ証文を差出すと然る医に承りて承知致して居ります、何故に拙者が毒を盛りましよう、毛頭覚えなない事、拙者に能く似た者が有つて必ず人間違いでござろう、毛頭覚えはございませぬ」

豊「亭主の敵を討ちたいという心掛の女が、毒を盛つた者と他の者と取り違えようか、如何に陳ずるとも迎も免れん処、其の方天命は心得て居るだらうな」

清「存じて居ります、存じては居りますが、決して覚えはございませぬ」

豊「上を欺くな」

清「いえ欺きません、殺して置いて殺さんと云えば上を欺き、殺しませんものを殺したというも上を欺く事でございます、どのような強い責に遭いましても覚えなない事は白状いたされませぬ、はい如何にも残念な事で、御推察下され」

とどうも言葉の様子に曇りもなく、毒を盛るような侍ではないなど云う事がお目に触れたから、

豊「然れば其の方は前々は何処の藩中である、主名を申せ」

清 「主名は申されません、主家の恥辱に相成る事、どのようなお尋ねがあつても主人の名前は申されません、仮令たとひ身体が砕けましようとも、骨が折れましても主名を明かしましては武士道が立たんから決して申し上げられません」

豊 「其の方出しゆっしやう生いすくは何処だ」

清 「天地の間でございます」

豊 「黙れ、其の方奉行を嘲ちやうろう弄いたすな

清 「いえ、何うどいたして、天下のお役人様、殊に御名奉行と承り承知致して居ります、甚はなはだ恐れ多い事で、決して嘲弄は致しません、主名を申すと主しゆうの恥辱はじに相成るから申し上げられんと云うので、又々生れ処をお問がありましたも是を申し上げればおのずから主名を明すような事で、故に天地の間と申し上げましたが、何はやお上を軽蔑いたすような申し分で重々恐れ入ります、だが何どのように仰せられ肉がたゞれ骨を砕かれても決して申し上げられません、毛頭覚えはございません」

と更に恐るゝ気色けしきなきに御奉行も言い様がない。主名は明されん、武士道が立たんといふに、

豊 「吟味中入じゆろつ牢らう申し付ける」

と此の下河原清左衛門が入牢を申し付けられたのは実に災難な事で、なれども斯ういう  
柔和の人が或は毒を盛ったか解りません、是から何れも念に念を入れ、吟味与力も骨を折  
つて調べたがいつかな云わん、誠に薄命の事で。是からお話が二つに分れまして、又娘の  
お筆は、どうも身に覚えのない濡衣ぬれぎぬで袂たもとから巾着が出て板の間の悪名あくみょうを付けられた  
からは、お父さんが物堅いから言訳を申しても立たない、誰にも顔を合されないので寧ろ  
の事一と思いに死のうというので、湯屋の裏口から駈出して小日向に参りましたのは、祖  
父祖母の葬つてある寺は小日向台町の清巖寺せいがんじで有りますから参詣を致し、夫から又廻  
り道をして両国へ掛つて深川靈岸れいがんの寺中じちゅう永久寺えいきゅうじへ参り、母の墓所へ香華こうげを手向けて  
涙ながら、

筆「もしお母様つかさん、誠に私は不孝者わたくしでございます、お母さんには早くお別れ申して何一  
つ御恩も送らず小さい時から御養育をうけました大恩のある一人のお父さんとつを捨て、先立  
つ不孝は済まぬ事ではございますが、どうもお父さんの前へ面目なくつてお顔が合わせら  
れませんか、お父さんに先立つて今晚入水じゆすい致し相果てます、草葉の蔭にお在なさるお  
母様にお目に掛りまして不孝のお詫を致しますから、どうぞお免し下さい」

と生たる母にももの云う如く袖を絞つて泣き伏して居ますがやゝ暫くの間で、其の中に

最う日が暮れかゝりましたから霊岸を出て、深川の木場を廻り夜の更るを待て永代橋へ掛りました。其の時は少し雪模様になつてひゆうくと風が吹き往来も止つた様子、当今なれば巡査がポカアリく廻られて居るから飛込む事は出来ませんが、人通りのないのを幸欄干に手を掛けて、

ふで「南無阿弥陀仏く〜」

と唱えながら覚悟を極めましてほかり飛込みました。するとスーツと浮くもので、飛込むと丁度足が下へ着くとずつと浮く、夫から又沈んでまた浮く、其の中にがぶく水を飲んで苦しむので断末間の苦みをして死ぬのだと云う事で、沈着いた人は水へ落ちても死なぬと申します、彼は慌てるあれあわと身体がたて堅になるので沈みますので身体が横になると浮上るものです、心の静しずかな人は川へ落ちても、あゝ落ちたなと少しも騒がないで腕を組んで下迄すーつと沈むと又ずつと浮いて来る、処で水をかけば助かるといふのですが、然そう旨くは行かん者で、お筆は二度目にずつと浮上つた処へ、永代の橋はしぐい杭の処へずつと港板みなしが出て何なんだか知りませんがそれと云つて船頭が島田鬻を取つて引上げました。

船頭「まだ宜ようござえやす息があります」

客「まだ事は切れない、もう少し此方こちらへ入れてくんな、濡ぬれてゝも宜よい、大方然そうだろう

と思つたが全く死しにおく後しごれたに違ちがひない、彌助やすけお前まへ其そこ処どを退ひきな、何か薬くすりがあつたらう、水を吐つかせなければならん」

と大騒おほさわぎ、大勢おほぜい寄よつて集たかつて介抱かいぼうしたから、お筆ふでは漸やっと氣きが付ついて見ると屋根船やねぶねの中でございます、それに皆知みならん人許びとりでござりました、見ると其その儘まま泣な伏ふしますを見て共に涙なみだを拭ぬぐいます客きやくは、夫婦ふうふ連れと見えて、

主「やア是これはおとみじやアない」

妻「おや／＼私は着物きものや帯おビの模様ようばうが似にて居ゐたから必然てつきりおとみだと思おもつたら、着物きものの紋もんが違ちがつて居ゐる」

主「お、然そうだ、誠まことに何なにうも：まあ氣きが付ついて宜よろかつた、何なにしろ氣きの毒どくな事ことだ、もし姉ねえさんお前まへ何なにういう訳わけだえ」

筆「はい、何なにうぞお見逃みぬしなすつて下さい」

主「見逃みぬせたつて何なにう見殺みころしになるものか、船ふねの港板端みなといたへ、どぶんと音を聞きいたから船頭ふねがしらに引揚ひきあげて貰もらつて介抱かいぼうした処ところが氣きが付ついたので安心あんしん致いたしましたが、もし姉ねえさんまアお聞ききよ、そりや能よく々の事ことだから身みを投なげたのであろうが、見逃みぬすという訳わけには往いかん、まア私わたしの家うちは浅草あさくさの福井町ふくいちやうだから：何なにう云いう事ことか家うちへ歸かえつて緩ゆるりと事柄ことばを聞ききましよう

…あれさ然そんな事を云つても姉さん打捨うつちやつて置く訳にはいかぬ」

筆「それでもどうぞお見逃しなすつて」

主「そんな事を云わずに姉さんまア心を落着けなさい」

筆「はい、是には種いろく々訳があつて死なねばなりませんので」

主「夫それは種々訳もあろうけれど兎に角、そんな事を云つても誰でもそんなら死ぬが宜いと手を放して見すく飛込ませる訳にはいかん」

妻「まア一旦私うちの家へお出でなさい、気を沈めて此のお薬を服のんで」

と夫婦の介抱で漸く気は落着きました、

筆「何うも生きて居おられませんが深い訳の有ります事故ゆゑどうぞ何卒助けると思おぼしめ召して殺さして下さいまし」

主「助けると思つて殺させる者はない、其の訳は緩ゆつくり聞こうから兎も角わし私と一緒ににお出でなさい」

と漸くに船を急がせ石切いしきり河岸へ船を附けて、浅草福井町の米倉屋孫右衛門よねくらやまごえもんと申して奉公人の二三人も使つて居ります可なりの身代の人でございしますが、自分の家うちへ連れて参りました。

孫「これ何を呼びなよ、あの金太をそうして表へ錠を下すのだよ」

奉「へい夫でも駈出すといけませんから」

孫「駈出す気遣はない、大丈夫だよ、さア姉さん此処へお出で：あのおよしや御仏前へ線香を上げてなアもうお線香が立たない様だから、香炉の灰を灰振いで振ってお呉れ：見れば誠にお人柄の容姿形も賤しからん姉さんだがお屋敷さんか、どういふ処にお在で、何ういふ訳があつて身を投げたか、それを聞かせて下さい、親御も嘸案じて居ましよう、能く考えて見なさい、両親を残してお前様、先立つて死ぬといふのは無分別と申す者で、同胞衆も御親類でも何んなに心配するか知れん、何ういふ事があるかは知らんが、何の死なゝいでも宜い事と人に笑われる事の有るもの、歳行かん内は分別なしで困るものさ、実にそれは後に残る御両親のお心根をお察し申します、其の歎きは何の位だか知れませんかよ」

筆「はい、何うも御親切に有難う存じますが是には種々深い訳がありまして、名前住所は申し上げられません、どうぞお慈悲と思召してお見逃しなすって下さい」

妻「まあ然んな事を云わずに何うか其の訳を聞かせて下さい、私も娘の行方が知れなくなつて、それがまあ実は家に居た手代の金次郎という者と、まあ誠にお恥かしい事だけ



れども悪い事をして、親にも申し訳がないというので死ぬ気になったと見え、二人共家を出で昨日まで行方が知れませんが、処が金次郎の死骸だけは分つて鉄砲洲で引揚げましたから金次郎の親の家が芝の田町で有りますから旦那と私と行つて是々と話すと先方でも一方ならん歎ではありましたが、まだ私の娘の死骸が分りませんので諸方へ手分をして捜している内、何処其処へ斯ういう死骸が流れて来たなど、人の噂を聞き、船で彼方此方捜して永代の橋の処まで来ると、今飛込んだ娘があるというから、実は自分の娘と思つて慌て、船頭に頼んで引揚げて貰つた処が、お前さんまア歳頃といい私共の娘と同じ形の小紋の紋附帯も矢張紫繻子必定我子と思いましたが、顔を見れば違っているから、実は落胆しましたが、娘を持つ親の心持は同じ事で、嗚お前さんの親御も案じてお在でだろうから、何事も打明けて仰しやいまし」

と親切に言われて、お筆は唯泣いて居りました。

## 四

お筆は漸々顔を上げまして、

筆「御親切は有難う存じますが、是には深い訳がございまして、親共に顔向の出来ない事どうぞで、何卒お見逃し下さい、親共は堅い気性でございまして、此の儘帰れば手打に相成ります、それも厭いといませませんが却かえつて愁なまじい立腹をさせるよりは今一ひとおも 思いに死んだ方が宜いと存じますから……」

孫「そんな解らん事を云つて困るよ、お父とつさんが手打にするというのは夫それはほんの嚇おどしで、能く然そんな事をいう者だが、私共のような者でも一人娘が時々心得違いの事でもあると、只一人の娘でも叩き出すというが、お侍が手打にするとこのと同じ事で、決して本当に手打にしたり、叩き出したり出来る訳の者ではない……これ時ときぞう藏は帰つたか何うも知れないか」

時「へえ、王子あちらの方でも、何うも彼方あちらへ入いらつしやいませんそうで彼方でもお驚きで、何れ此方こちらからお訪ね申すという事だ」

孫「夫は困つたなア、あの瀧たきしろ二郎は帰つて来たか」

瀧「へえ、只今帰りました」

孫「何をマゴくして居るのだ早く此方こちへ来て知らせて呉れないでは困るなア、何うだのう、知れないか」

瀧「へえ、伊皿子台いざらこたひの方へもお出でがないって、何うもお驚きで誠に飛んだ事でお仕合せな事だと斯こう申しました」

孫「何がお仕合せだ、何なんだか解らん口上ばかり云つて……まあも一度本気になつて迷まい児ごを尋ねに出て貰もらいたい」

瀧「迷まい児ごどころではない、もう十八になつた娘でございますから迷まい親おやで」

孫「誰だ、そんな悪わる口くちをいうのは」

御主人は立腹致す、大騒さわぎで、是から八方へ手を分けて尋ねます中に、築地の方へ流れて来た死骸は是々だというから直すくに行つて見ると全く娘の死骸でございますから、直に検視を願つて漸く家うちへ引取つて、野辺の送りを致すやら実にひつくりかえ転覆ひつくりかえるような騒さわぎ、それで段々延々のびくになつて彼の娘かの事をきく間まもないほどの実に一通りならん愁傷しゆじやうで、先初まづよな七日ぬかの寺詣りも済みましたが、娘は駈出かそうと思つても人が附ついて居るから、又駈出かして愁傷の処を騒さわがせて厄介を掛けては氣の毒と思つたから、奥の狭い処へ這入つて只此こ処の親達の心を察しは泣き、自分の親も嘸さや案あじて居るだろうと心配しては泣き、見るにつけ聞くにつけても涙ばかり、漸く二七日にしちにちも済みましたから、

孫「どうも大きに御苦勞だつた、今度は変死の事だから寺詣りも何も派手には行ゆかず、

碌々他に何も致さんが、何れ仏の為には功德をする積りだ……あのなに何とか云つた、あの娘の名よ」

妻「まだ申しませんよ」

孫「困るのう、何とか云つて呉れ、ば宜いに、何うしても云わんかえ、是へ呼んでおくれ、婆さんお前に昨夜云つた事を得心するだろうか、まア姉さん此処へお出で、泣かなくつても宜い、実に私が泣きたい位だ、少し察しておくれ」

筆「はい嘸段々お淋しゆうございましょう」

孫「いやもう只た一人の娘を失してまるきり暗夜になつたようで、お前さんを見ると思ひ出します、然しまア私の娘の方は事が分つて、斯うやって二七日も済ましたが、遂々娘の事ばかり思つて居て、お前様の事を聞くのも段々延びたが、何うかお前さんの身の上を打明けて呉れないと困る、ねえ二十日も三十日も人の娘を只預かつてお前様の親御に申訳ない、只駈出した訳でない、何れ仔細あつて出た事であろうから親御の心配と云う者は一方ならん事で、お前が明らさまに云つて呉れないと何うも困るねえ」

筆「はい」

孫「何卒云つて下さい、ねえ私も斯うやって愁傷の中だから心配を掛けて下さるな」

妻「本当に旦那の云う通り、して若い中うちから余り丈夫でないから今年五十四になって、殊におとみが彼あいう訳になつてから、なおくヨボくして来てねえ、然そうしてお前のお父ととさんの処へ送り届けなければならぬと心配して居ますが、只たつ一人の娘を失なくしたから何なんならお前さんを家の娘うちに貰もらいたい位で、何しろ話して下さいな」

とだんく親切に夫婦が尋ねますからお筆は、胸に迫り、繻じゆばん絆の袖で涙を拭きながら、筆「はい、はい、誠に御心配を掛けて済みません、それでは申上げますが私わたくしは築地小田原町に居ります下河原清左衛門と申す浪人ものゝ娘でございます」

孫「なに下河原、フム御浪人だね、築地小田原町で……お母つかさんもお達者かえ」

筆「いえ、私わたくしが四つの時に亡なりました、親父の丹精で是までに成長致しました」

孫「おゝそれでは尚更案じて居ましよう、早くお知らせ申さなければいけない、これよ時藏ときざうや」

時「へえ」

孫「えー築地小田原町で何なんとか云つたのう、うむ下河原清左衛門と云うお方だ、其の娘でな……お名前は何とお云いだね」

筆「ふでと申します」

孫「まあおふでさんかえ……お前一つ下河原さんへ行つて、実はお娘子のおふでさんが永代橋から身を投げた処を助けた処が、何うしても名前を云わないでお届け申す事が出来ず、其の中私の方でも愁傷の中で取紛れて、存じながらお訪ね申さなかつたが、段々とお尋ね申した末に、漸くお名前も知れたから早速お知らせ申すが、御無事でお在だから御心配をなさるな、明日此方からお娘子を連れて参るから前以てお知らせ申すと早く行つて来な、あゝ申しお家主の名は何と申しますえ」

筆「はい金兵衛さんと申します」

孫「町役人は金兵衛様というのだよ、大急ぎでなア」

時「へえー」

奉公人は駈出して参りましたが暫らく経つて夜に入つて帰つて参りました。

時「へえ只今行つて参りました」

孫「あゝ御苦労だった、分つたかえ」

時「へえ解りました」

孫「親御様も嘸案じて居たろう」

時「それが其の親御がお娘子を捜しに出たきり行方が知れませんかというので」

妻「此の姉さんのお父さんが」

時「へえ、家主おおやさんが大變に案じてお在いで、其のお父さんが、只ただ一人の娘を失なくし今まで知れないのは全く死んだに違ちがいない、最早樂しみもないから頭を剃かつて廻かい国こくするといふ置手紙を残して居なくなつて仕舞い、諸道具も置形見にして行きましたと云つて家おおや主様さんも大變心配して居た処へ、此方こちらから知らせたので夫婦共に大喜びで、どうも有難ありがたい、決してお出いでには及びません、私わたくしの方から引取に出いでます、今晚遅くとも上あがりますといふ事ことでございます」

孫「それはく親切の家いえぬし主ぬしさんだ」

筆「え、夫それではお父様とつさまは剃髪して廻い国こくにでもお出いでになりましたか」と泣倒なみれます。

孫「それだから早くお前さんが然そう云えば宜いいのに、今になつて然そんな事を云つても仕方がない、家主が引取に来ると云うから、御酒ごしゆの一盞ひつづも上げなければならぬから其の支度しどをして置きなさい、肴よも何か好よい物を取つて置くが宜よい、なに然そう泣いて居てはいけない、お父様とつさまが頭を剃かつて廻かい国こくをすると云つて行方知れずになり、お母つかさん様も親類もなくなつて、他に兄弟衆もなく心細くもあろうから、私の処へ居て、是も何なんぞ

の因縁と思つて家の娘に成つて下さい、まア然んな不自由もさせないから、お前を貰つて  
堅い養子を貰いたいが、私の子に成つて何うか死しにみず水とつて貰いたい、築地のお家主にも  
話を仕ようが、どうか得心して下さいな」

妻「私も然う思つて居ますよ、ねえ姉さん此の儘にずるずるベツタリ家の娘に成つてお  
呉れなら養子をして安心を致しますから、何卒然うして貰い度うとございます」

孫「まア女は女どしだからお前の処へ連れて行つて緩り話をしなさい」

妻「はい、さアお前此方へお出で」

と孫右衛門の妻が是から次の間へ連れて行つて種々娘に迫るから義理にも厭いやとは言  
われません。

筆「はい、いずれ考えまして御挨拶を申しましょう」

と云う内に参りましたのは築地の家主金兵衛で、

家「御免下さい」

奉公人「誰方だえ」

家「築地小田原町の町役人山田金兵衛と申す者で」

奉「入つしやいまし、此方へお上りなすつて何うか、且那小田原町のお家主金兵衛様さんが



入つしやいました」

孫「お、夫それはまア、此方へどうか」

家「へい始めまして、え、家主山田金兵衛で至つて不調法者で不思議な御縁でお目に掛ります、幾久しくお心安く願います」

孫「はい、始めまして米倉孫右衛門と申す疎そこ忽つもの者でお心安う願います、これ布団を出しな、烟草盆にお茶を早く……さア何卒どう此方へく」

金「もうお構い下さいますな、誠に此の度たびはどうも御親切に有難う存じます、私も心配致して居りましたが店子たなこの者で親子二人暮して居りますが、其の娘が至つて孝行者で寝る目も寝ないで孝行をして居るを気の毒に存じ他の店子と違つて私も丹精を致して居りました処でまア詰らん事の災難で……全く其のお筆と云う者が桂庵ばいアの婆ばアの巾着とを盗つた訳では有りません、実はその婆が妾奉公に世話をしてやると云つたのを、お筆の親が侍の事で物堅いから、怪けしからん不礼ぶれいな婆あつこだと悪口あつこを申して帰しましたのを遺恨たくに思つて、企たくんでされたと云う事も直すくに分つて、決して人様の物を取る様な娘ではないので誠にどうも飛んだ災難で、お筆は一途いちずに残念に思いました処から、駈出して入水致したを、お助け下さいました趣おもむきで有難う存じます、それに亦またお宅の嬢様も御お逝去なくなりと承りましたが嘸さぞ御愁傷で、

七日の朝築地の波除杭の処へ土左衛門が揚つたと云うので、私も思わずお筆の死骸と存  
じまして跣足で箸と茶碗を持つて駈出す様な事で、行つて見ると小紋の紋附に紫縷子の帯  
を締めまして赤い切を頭へ掛けて居りまして、お筆ではないかと存じましたが、それが此  
方のお嬢様の御死骸と只今承る様な事で」

孫「成程それはく誠にどうも」

金「え、其のお筆が居りますなれば私が逢い度いもので、是へ何卒お呼びなすつて」

孫「誠に間が悪がつて、貴方にお目には掛れないと云つて居ります」

家「なに然んな事は有りません、これお筆さんや何でお前どうも困るじやアないか」

孫「まア其様に大きな声をなすつては却つていけません、これ婆ア此処へ連れてお出で

く

妻「さア此処へお出で」

と孫右衛門の妻に連れられてお筆は面目なげに泣きながら出て参りまして、顔も上げ得  
ませんで泣伏して居ります。

家「お前まア、何ういう訳でそんな軽率な事をしたのだえ、無分別の事ではないか

え、私に言い悪ければ家内にでも云つて呉れ、ば此様な事にはならないものを、親父さん

は一人の娘が入水を致したからは此の世に何一つ楽しみはないと置手紙をして世帯道具も其の儘置去りにして行方知れず、だが又帰る事もありましようから親御の帰るまで私の家へお帰り、面目ない事は少しもありませんよ、何時迄も此方にお世話になって居ては濟まん事で、さア、私と一緒に帰んなさい」

筆「はい」

孫「あゝ申し、就きまして貴方に折入つてお願がございしますが、此のお筆さんは今は親の無い身の上で何処へ参ると云う見当もない事で、親御の御得心の無い者を私の娘に貰い度いとも申されませんが、お前様が御承知下されば何うも此の娘を私の娘にし度いと思いませんが、是が深い縁があつて助けたのだと家内も申して居りますので、私は他に子供がなから、何卒此の娘を貰つて養子を仕様と云う積りで、親の承知の無い者をお貰い申すと云う訳ではないが、貴方から下さる様に茲は貴方が親御に成つて下されば宜いが、手前此の娘に決して不自由はさせません積りで、へい奉公人も大勢使つて居りますが其の中に好い心掛の者がありますから是を養子に貰おうと存じて居りました処、一人の娘が彼アいう事に成りましたので此の娘を助けて連れて帰りましたが、僅内に居ります間も誠に親切にして眞の親子の様にして呉れまして、何だか可愛てなりません、是も何その縁でご

ございましたから、どうか貴方が親御に成つて此の娘を下さる様な訳には行きませんか」  
家「成程至極御尤ごもつともの儀ではございますが、別段私わたくしが其の親から頼みを受けたということもなし、世帯道具を残らず置いて娘の行方を尋ねに参つた事で又帰る様な事に成りましょうから、何どうも私わたしが得心の上で差上げる訳にも成りません、手前の方でも又少し夫それはねえ、もしお筆さん、夫もあるものだから直すくに此方こちらの娘と云う訳にも行きませまいと存じます、是はどうも然そう参りませんア」

孫「左様ではござりましょうが、ねえお筆さん私が折入つてお願いがどうかね、是も何かの約束と思つてまア、私の娘に成つて下さいなね、夫婦とも子のない身の上でどうか願願いたいが、のう婆さん」

妻「どうかねえ貴方が御得心で親御の行方が分る迄も此方こちらへ居て貰うようお願い度たいものでね」

と夫婦が種々いろくに折入つて頼みますが、金兵衛は其の実はお筆を連れて帰り、自分の甥の嫁に致したい心底ですから困りまして、

金「でもございましょうが何なんでございます、其の事に付いて種々訳のある事で、私も一通りならん心配を致しましたから一旦連れて帰つて家内に面会させまして其の後ののちの事に致

しましよう」

孫「夫は至極御尤の事でございます、が何うかまア御無理だが是非願ひ度い、せめて親御のお帰り迄お預け置き下さい、此の子も御縁あつて私の処へお出でに成つたのですから親父さんがお帰りになりましたから其の時お歸し申しても又御承知の上で此方へ更めて戴くと云う様な事に致し度いもので、どうかナア其処は貴方が御承知を願ひ度いものでございます」

金「その一体其の何も私共が兎や角と云う訳ではないが、私の店子でございまして店子と申せば子も同様の者でございましてから実は其の私の方で引取るのが当然の訳で清左衛門の文面の様子でも歸る様な事で見れば、又歸りました上で清左衛門へ話も致しますが今晚の処は連れて帰ります」

孫「さようでは有りましたようが兎も角親御のお歸りまで貴方御得心でお預け下さいませ様に願ひ度いもので」

金「夫は何うもねえ、お筆さん其処は当人の了簡も聞かなければなりません、私が兎や角拒む訳はないが、へえお筆さん、どうしたもので」

孫「もう夫は家内と確かに相談して見ると親兄弟もない身の上だから然う云う事にして

呉れ、ば私も命を助けられた恩返しに孝行を致したいと此の娘も申します」

金「それは然うあるべき訳でございますけれども、私も随分お筆様を丹精致した事は中々貧苦のなに貧乏と申す訳ではありませんが、まあ困つて居る処を私が余程肩を入れて内職を教えたり種々にして、まあ斯う云う訳に成つたので、どうも私一人が得心する訳にも行かんからお筆様、お前が是を確りして此の挨拶をしてお呉れ、私の家内にも一旦相談して見なければならぬが、お前さんはまあどう云う心持だえ」

筆「誠にもう何とも申訳はございません、貴方のお家へも済みませんが、此方様でも命をお助け下さつたのみならず種々御心配を掛け、殊には私と同じ様なお嬢様も入水を成さつて相果て、此方の御両親のお心持をお察し申しますと誠にお気の毒様で、どうも是程に不束な私を、あゝ仰しやつて下さりしますものを無にも致されませんから、それに大恩のあるお両人様でございますから親父の帰る迄此方様の御厄介に成つて私も居ります積りでござりますから左様思召して下されまし、何れ其の中御家内様へお目に掛けてお詫を致しますから、どうか貴方から宜しゅう仰しやつて下さいまし」

と涙を拭きながら申しますから

金「どうも然う云う訳ですかなア、じゃア、まあお暇致しましょう」

と金兵衛もお筆が申すので仕様がなから、ブツ／＼云いながら立帰りました。是が縁で此のお筆が此の家の娘になりましたが、誠に不幸の人で再び大難に遇う条一寸一息つきまして。

## 五

え、米倉屋孫右衛門の家では、二月の十日が娘の三十五日で谷中静雲寺に於て、水死致した娘の事で有りますから、猶更懇ろに法事供養を致しました。すると其の年の八月此の米倉屋孫右衛門の家内おゆうが四十七歳で死みまかり去まりました、重ね／＼の不幸のみならず、娘の入水致した時などは、余程入費も費ついやしました事で、引続いて種々いろくの物入ものいりのございましたので、身代も余程衰えて来た処へ、其の年の十一月二十九日の日ひに艸倉もみぐらの脇から出火で福井町から茅町かやちよう二丁目を焼き払った時に土蔵を落して丸焼に成り、米倉孫右衛門、神田三河町に立退きまして商売替を致し、米商売を始めました処、案外の損を致しました、然しかるに又宝暦の六年は御案内の年代記にも出て居りますが、江戸の大火で再び焼失致しましたから遂に身代限りを致し、何どうも致いたしかた方かたがないから僅わずかの金を借りて京橋

の鍛冶町へ二間間口の家を借り、娘に小間物を商なわせ、小商を致して居ります中に、余り心配を致したのが原因に成つて孫右衛門は病の床に就きました、娘のお筆は大切に看病を致して居りますが、誠に不幸な人でございました、死ぬ処を助けられて宜い処へ行つたと思うと其の家が零落を致し養母には間も無く死別れ、親父は病気に成つて其の看病を致しますが、一体孝心の娘でございませうから、店で商いを致しながら父の看病を怠なく致しまする故か、孫右衛門の病氣も怠つた様でございませう、頓と身体が利きませぬ、先ず中氣の様に成りました、仕方がないから家主藤兵衛へ相談の上、店を仕舞つて裏屋住いに成り、お筆が僅の内職を致しますが居立の悪い親を介抱致しながらでございませうから、内職を致す間も碌々ございませぬ、親父が寝付いた間に内職を致すのだから何程の工錢も取れませぬ、売り喰いに致して居りましたが、末には、何うも致方がない、読者は御存じがありますまいが、貧乏人の身にある事で米薪が切れる、着物が切れる畳が切れる、其のぼろを隠すのは苦しいもので有ります。お筆はお米を買う事が出来ないから、自分が喰はずに米櫃を払つてお粥にして父に喰べさせても、己はお腹が空いた顔を見せませぬ、近処でも是を知つて可哀想に思つて居りますが直き其の裏に五斗俵市と云う人がございませぬ。茶舟の船頭で五斗俵を担ぐと云う程の力の人でございませぬ、其処の姐御は



至極情け深い人で、然う云う強い人の女房でございますから鬼の女房にようぼに鬼神きしんの譬たとえ、ものゝ道理の分つた婦人で有りますから、お筆を可愛がつて居ります。

女房「おい、勘次かんじや、お前あの奥のお筆さんの処ついでへ序ついでに水を汲んでやんなよ、病人があるから定めし不自由だろう、何かお菜かすこしらを拵かすこしらえてやろうと思うが、手一つで親の看病をしながら内職をして居るので、何もする事が出来ないだよ、可哀想だから目をかけて遣やんなよ」

勘「え、姐さん目をかける処せこうじゃアない、何時いつでも井戸端へ行きたア、水を汲んでやります」

女「焼豆腐を煮てやりたいと思うが、勘次、お前出来るかえ」

勘「え、出来ますとも私わっちが煮て上げましょう」

女「お前に煮られる者か」

勘「煮られなくて、七輪を此処ここへ持つて来やしよう」

女「そうだねえ、まア火を煽おこしてお呉れ……消炭けしずみを下へ入れて堅い炭を上へ入れるのだよ、あら、鍋が空じやアないか、湯を入れて掛けるのだアね、旨くやんねえよ」

勘「宜ようげす……それ七輪の火が煽おこつて来た……徐々そろそ湯が沸立にたつて来たぞ御覽ごらんじろ今に旨く煮てやるから一寸ちよつとお塩梅あんばいをしよう」

女「おい、お前が何も塩梅しなくつても宜い、然うバタ／＼七輪の下を煽がないでも宜いよ、お前のは他見ばかりして居るから、上の方で灰ばかり立って火が煽りやアしない」

勘「なに、大丈夫だ今旨く煮て見せやす、ねえ姐さん／＼」

女「何だい」

勘「裏のお筆さん位美しい女は沢山はありませぬねえ」

女「あゝ美しい嬢だねえ、人柄がいゝねえ」

勘「女が美くつて人柄が宜い上に、一寸気が利いて、親孝行で、あんな好い娘はありませぬ」

女「可哀想にあの位の器量をもつて…」

勘「ありやア姐さん、親父さんが死んで仕舞うと却つて助かりますぜ」

女「そんな事を云いなさんなよ」

勘「あの親父は堅いから喧しいが親父が死んで仕舞えば旦那でも何でも取れます、あれで軟かい着物でも着せてお化粧をさせて置いて御覧なせえ、そりやア素敵なものだ、親父はもう、直に死にますぜ」

女「馬鹿な事をお云いでない、只た一人のお父さんが逝去つた日には本当に可哀そうだ」

勘「なに死ねば宜いや、兎も角も美しい嬢ですねえ」

女「真実に宜いのう、愛らしいこと、人柄で恰でお屋敷さんのお嬢さん見たようで、実に女でも惚れ／＼するのう」

勘「姐さんでも惚れますかえ」

女「お前水を汲んでやんなよ」

勘「汲んでやる処じやアない、お筆さんが井戸端へ行くと跡から飛んで行つて汲んでやるので、此間も佐吉の野郎が水を汲んで喧嘩をしやした、恰でお筆さんは手を下す事もないが、佐吉の野郎が助倍な奴で、お筆さんだと大騒ぎやつて汲んでやりやアがつて井戸端へ洗濯屋の婆さんが来て私にも汲んでお呉れというとね、佐吉が井戸を覗き込んでいゝ塩梅の中に水があれば宜いが、と井戸に水のねえ訳はねえが現金な野郎で：何しろ好い女だ、親父が死んで仕舞うと旦那を取るよ、親父が死ぬと彼方此方で世話をする者があると死んだ親父に濟まないから旦那なんぞを取るのには厭だと云うねえ、それを強て勧めるから旦那を取るけれども若い好い男は取らないねえ、何でも六十三四位の金のある奴を勧める」と屹度旦那に取りますぜ」

女「どうだか知れやアしない」

勘「なアに取りますよ、取るけれども彼ア云う気性だから旦那に金を遣わせないね、大きな家へも這入らない、新道で一寸八畳に六畳位の小さな土蔵でもある位な家を借りて居るね、下女は成丈け遣わない、自分でお飯を焚いたり何か為ますそれで綺麗好だから毎朝表の格子を拭きますよ、其の時其の前を私が通り掛つたら、何うだろう」

女「誰れが」

勘「私さ、扮装を拵えるね此様な扮装じやアいけないが結城紬の茶の万筋の着物に上へ唐棧の縞の通し襟の半苧を引掛けて白木の三尺でもない、それより彼の子は温和い方が好きですかねえ、草履より駒下駄を履いて前を通りましようお筆さんが見ると屹度声をかけますよ、おや勘次さん、おや姉さんお宅は此処ですかえ、はア斯んな処へ来ました、まアおよんなさいよお茶を飲つて行つてお呉んなさいよと先方で云うに違いない、義理堅い娘だから、水や何か汲んでもらつた廉があるからお上んなさいよと云うねえ、此処で私が旦那でもお在でだとお邪魔に成るからと云うと、いゝえ誰も居ませんから、まアお上んなさいましよと手を取つて引張るね、寄りたいけれども其の時やア私は我慢して、何れ又というので無理に振り払つて帰るね、二度目に通る時に又おつな扮装をして今度は此方から声を掛けると、まア上つてお呉んなさいと引張り込んでお茶を入れる、家に酒も

附いて居るから一寸お一つ召し上れと私の酒好きを知っているから、気が付く子だから酒を出す、これは済みませんねえ、旦那は毎晩お出でなさるかと聞くと、いゝえ毎晩は来ません通い番頭で年を老つて居ますから、月に漸く三度位しきやア来ません、時々遊びに参つても宜うございますか、宜いどころじゃありません、どうぞ始終遊びに来て下さい、姐さんはお壯健ですかとお前さんを聞くよ、情愛があるから……それから屡々遊びに行つて何時も御馳走に成つて済まないと偶には何か奢つてやるね、度々行く様に成るとそこは阿漕の浦に引網とやらで頭れずには居ない、其の番頭が愚図く云うに違いな、然うすると私が依怙地に成つて何を云やアがる此方じゃア元より一つ長屋に居たんだ、確乎と約束がある女だ、誰に断つて此の女を慰み者にして居ると威張るね……いや然んな事を云うと彼の娘が驚いて愛想をつかすといけねえから……なに構わない向うは歳を老つて居るから威して先の家へねじ込んで仕舞えば然んならばと云うので、手切れに成る」

女「何だえお前、何でも無いのに手切れが取れるものかね」

勘「今はまだ何でもありませんが今に成るねえ、併し然う喧しく掛合つてもあの子が心配をするから、其処は旨く話合いにして百両取るよ、然うしたら私は質から出したい着物がある、そうなるとお前さんに芝居を奢りますね」

女「勘次お前気が違ったのかよ」

勘「だって本気です、七輪の火がおこらねえが」

女「其の筈よ猫の尻を煽いでるぜ」

勘「シ、猫め彼方へ行け、是れは恐れ入った、姐さん今に煮えたら直に持つて行きましよう」

と交々、近所の者がお菜を持つて往きますから、喰物に不自由はないが肝心のお米と炭薪などは買わなければなりません、段々に冬に成る程詰つて参り、遂には明日のお米を買つて親父にたべさせる事も出来なくなりました。

六

お筆は何うしたら宜かろうと種々考えましたが、斯うなつては逆も致し方がないから、能く人が切羽に詰つた時には往來の人の袖に縋る事も有ると聞いた事もあるから、袖乞に出る氣に成りましたが、あゝ恥かしい事では有るが親の為には厭う処でないが袖乞をする事がお父さんに知れたら猶御心配をかけるようなものだと思つて種々に考えまして親父の寝付

いた時分に窃と抜け出して数寄屋河岸の柳番屋の脇の処に立つて居りました。寒くなると人の往来は少のうなります、酒臭き人の往逢う寒さかなという句がありますが、たま〜通る人を見ても恵を受けようと思ふ様な人はさっぱり通りません。お筆は手拭を冠つて顔を隠し焼け穴だらけの前掛に結びつ玉だらけの細帯を締めて肌着が無いから慄えて柳の蔭に立つて居ると、丁度此処へ小田原提灯を点けて二人連れで通り掛つた者がありますから、筆「もし貴方」

と言掛けましたが是は中々云えんそうでございますが実に慣れないでは云えるものではない、乞食が慣れて来ると段々貰いが多くなるそうで、只今では無いが浪人者が親子連れで「永々の浪人御憐愍を」と扇へ受けまして、有難う存じます、と扇を左の手に受けて一文貰うと右の手に取つて袂へ入れる、其の間に余程手間が取れるから往々貰い損います、少し馴れて来ると、有難う存じますと直に扇から掌へお錢を取る様に成る、もう一步慣れたら何うなりますか、併し乞食などは余り慣れないでも宜いが、有難う存じますと扇を持って居る掌へ込込ませると申しますが、慣れない事は仕様の無い者で中々その初めの中は云えん者だが明日御飯を喰べる事が出来ないと言ふ境界でございますから一生懸命であります、殊に命を助けて呉れた大恩のあるお父さんに御心配をかけては御病氣にも障

る事で何分にも他に何を致そうと思つても手放す事が出来ず、暗夜の事だから人に顔を見られなければ親の恥にも成るまいと思ひ、もう一生懸命で怖いも何も忘れて仕舞ひ、

筆「貴方お願いでございます」

○「ア、何だい突然に恟りした、どうも此処等へは獺が出るから……」

筆「永々親父が煩いまして難渋致します、何卒親子の者を助けると思召して御憐愍を願います」

○「然んなら早く然う云えば宜いのに吉田さん、袖乞だ一寸御覧」

と小田原提灯の火影で見ると

「中々美しい女だ繻絆を着ないで薄い袷見た様な物を着て何うも気の毒な事だの」

△「成程是は美しい素敵だ姉さん親父さんは余程悪いかえ」

筆「はい永い間病気で」

○「困るだろうねえ無尽を取つて来たから……取つて来たつて割返しだよ、当れば沢山上げるが只た六十四文ほきやアないが是をお前に私が志しで」

筆「有難う存じます」

と金を貰つてしくしく泣いて居りました、此の爲体を見て一座の男が、



甲「ア、泣くよ本当に嬉しいのだ、真に喜んで泣くよ偽にせこじ乞食じきでないから、お遣りお前は小花こはなの鬮くじが当たったから皆みんなお遣りよ何を愚図ぐくして居るのだ」

一人の男が不承／＼に出すを受取つて、

甲「さア此の人のだ二朱と二百上げるよ」

筆「有難う存じますく」

男「何うしても二朱と二百の方が礼が多い、だがね、姉さん此の男のは小花が当つて余計ものですが、私のはたった六十四文でも割返しだから、丁度二十両の内に這入つて居る者だから私の方は親切が深い」

乙「そう自分許ばかりいゝ子になりたがらなくつてもいゝぜ」

と錢を恵んで呉れましたのは天の助けで、それから又翌晩も出て是が三日四日続くと、もう幾らか様子を覚えましたから通り掛つた人の袖にすがりましてお願いでございますという、其の人は恟なりして、

男「何なんだい、恟なりさせやがる」

筆「親父が永々の病気で、難渋致しますから何卒どうぞお恵みを……」

男「ア、美よい女だ美よい娘こだねえ、五百やるから材木の蔭へ這入らないか」

などという悪い奴が中には有ります、お筆は驚いて御免遊ばせと云つて逃しましたが、段々寒くなるに従つて人通りがなくなり、十二月の月に這入つてヒユウ〜と云う風が烈しいから夜に入ると犬の吠える許り、往來は絶えて一人も通らんから、もう仕方がない私の様な者でも人様の云う事を聞けば五百文でもやると仰しやるが、身売つてもお父さんを助けたいけれども、私が居なければ介抱をしてもなし、お父さんに御飯をたべさせる事も出来ないから、身を売る訳にも行かず、進退谷まりまして誰にも知れる氣遣いがないから、思い切つて、身を穢してもお錢を貰つてお父さんに薬も飲ませ、旨い物を喰べさせて上げたいと可哀想に僅五百か六百の錢の為に此の孝行の美婦人が身を穢しても親を助けようという了簡になりましたのは実に不幸の娘であります。九ツも過ぎ、芝の大鐘は八ツ時でちらり〜と雪の花が顔に当る処へ、向うから白張の小田原提灯を点けて、ドツシリした黒羅紗の羽織に黒縮緬の宗十郎頭巾に紺甲斐絹のパッチ尻端折、紺足袋に雪駄穿き蠟色鞞の茶柄の大小を落差しにしてチャラリチャラリとやつて参りました、此の武家にお筆が頼み入る処、是が又一つの災難に相成るのお話。

え、引続きまする依田政談も、久しゆう大火に就ついて筆記を休んで居りましたが、跡も切目きれめになりましたから一席弁じます事で、昨日さくじつ火事見舞ながら講釈師の放牛舎ほうぎゆうしやど桃林子とうしの宅へ参りました処同子の宅は焼残やけのこりまして誠に僥倖しあわせだと云つて悦んで居りましたが、桃林とうちの家に町奉行の調べの本が有りまして、講釈師だけ丈に能く調べが届いて居る、本があるから貸して遣ろうと云うので、私は借りて参りまして段々調べて読んで見ますると、依田豊前守は、依田和泉守といい町奉行の時分は僅わずかな間でございます、延享えんきやう元年の六月十一日御目附おめつけから致して町奉行役を仰付けられ宝暦ほうれき三年の三月廿八日にはもう西丸にしまるの御槍奉行おやりぶぎやうに転じました事でございます。して見ると調べの間は長い事ではございません、其の次は曲淵甲斐守という是も名奉行で、宝暦三年四月の八日御作事奉行おさくしじぶぎやうより転じて依田豊前守と御交代になり明和めいわの六年八月十五日までお勤めに成つたという。大岡越前守、依田豊前守、曲淵甲斐守、根岸肥前守ねぎしひぜんのかみなどいはいは何れも御名奉行と云われた方で、申し続きましたお筆のお捌さばきは依田豊州公ほうしゅうこうから曲淵甲州公へ御引続おんひきつぎになりました一件で、錯雑ごみじりましてお聴き悪い事にくでございませう左様御承知を願います、扱さてお筆は数寄屋河岸の柳番屋の蔭へ一夜ひとよ置き位に出て袖乞ひたぎを致しまするも唯養父を助けたい一心で、恥し

いのも寒いのも打忘れて極ごく月げつヒュー〜風の吹きますものをも厭いとわず深しん更こうになる迄往  
来中なかに佇たんで居て、人の袖そでに縋すがるといふは誠に氣の毒な事で、人も善い時には善い事許ばかり  
有りますが、間が悪くなると引続いて悪い事許り来るものでお筆などは至つて親孝行にし  
て為ひとなり人も善し屋敷育ちでは有り、行儀作法も心得て居おるから誰に会つても誉ほめられる  
様な誠に柔和な娘で有りますけれ共、板の間を働いたという濡衣を着て、親父に面目ない  
と思う処から入水致しました処を、助けられたは仕合せで有つたが、その又己れを助けて  
呉れた米倉屋孫右衛門が零落を致して、京橋鍛冶町の裏家住い搗かて加えて長ながの病氣という  
ので、今は最もう何も彼かも売尽した処から袖乞いに出る様な始末、

筆「今日も夜更けて人も通らず、したが今夜百文でも二百文でも貰つて帰らなければ私  
の命を助けて呉れた大事なお父様とうさんに明日喰あべさせるものを宛あてがう事も出来ず、と云つてお  
腹なかを空すかさせては濟まない、私は喰いべなくても宜いいから何卒どうぞお父様丈にはお粥でも炊いて上  
げなければ成らないから、もう詮しかた方がない、いやらしい事を云う人でも有つたら誠に道な  
らん事では有るが寧いっそ此の身を任しても親の為めには替かえられない」

と、覚悟を致し、ヒューという寒風かぜを凌しのいで柳番屋の蔭に立つて居ると、向うから前申ぜん  
し上げた黒縮緬の頭巾を被り大小を落差しに致して黒無地の羽織、紺足袋という扮装こしらえで

通りました、白張しろはりの小田原提灯が見えましたから、

筆「ア、お武家で有るか、万ひよつと一したら少しはお恵みが有ろう」

と思いつか／＼と来りきた、もう怖いも恥かしいも打忘れ武家の袂たもとに縋りすが、

筆「お願いでございませす」

武家「ア：はア、……誰たれも居らんかと思つたので大きびつに悔ひり致つくしたが、何なんだえ、女子おなごかえ」

筆「はい：お父とつさんが長々煩わづいまして其の日に追われ、何も彼かも売うり済しましてもう明日あしたは親どもにお米を買かつて喰くべさせる事が出来ません、それ故誠にお恥かしい事でございませす、毎日此これ処へ参まりましては人様のお袖へ縋いつて聊いさかの御合ごごうり力りよくを受けまして親子の者が露命いのちを繋つないで居る者でございませす、けれ共今晩かよう斯か様に風が吹ふきますので薩張さつぱり人通りがございませんから、是迄立たつて居ましたが少しのお恵みも受けませす、今晚此の儘歸りましては親を見殺ころしに致いたす様なものと存ぞんじまして誠に御無理ではございませすが百文でも二百文でもお恵み下さいますれば親子の者が助たすかります、何卒どうぞ殿様お願いでございませす」

武家「はい：はい、それはお気の毒な事じゃ、むー……」

小田原提灯をこう持上げて見みますと、下を向むいて袖を顔に押当おて、ポロ／＼泣ないて居

ります。昵とその様子を見て居りましたが、臆て一掴みの金子を小菊に包んで、

武「これを遣わすから、早う帰つて親御に孝行を致せ、したが女子の身の夜中と云い、いかなる災難に遇わんとも限らんから 向後袖乞は止め致すがよい」

とお筆に渡すと其の儘往つて仕舞いました。お筆は嬉し涙にくれて見送つて居りました。が家へ帰つて包を明けて見ますと古金で四五十両、お筆は悔りして四辺を見廻し、

筆「はア…何うしたんだろう、心の迷いじゃアないか知ら、先刻彼所を通り掛つたのは武士と思つたのが狐か何かで私を化したのじゃアないか知らん、私がお鳥目を欲しいと思う其の氣を知つてつままれたのか知らん」

と足をギイーツと抓つたが痛いから、

筆「夢じゃアないが、ハテ何うしたんだろう、向後袖乞に出るなど仰しやつたから、御親切な殿様で私の戸外へ出ない様に多分にお金を下すつた事か、あゝ…私のは神さま……」

と手を合せて伏拝み何所の人だか知りませんから心の中で頻りと礼を云い、翌日に成りますると先ず此金でお米を買うんだと云う、其のお米を買うたつて一時に沢山買つて知れずでは悪いと思ひましたから、狐鼠り少し買ひ、一朱もお金を出せば薪も買えれば炭も買え

る、又金を一つ処へ仕舞つて置いて知れると思ひましたから、彼方此方へお金を片付けて仕舞つて置きまして、些とずつ出して使ひ、

筆「お父さまはお寒からうから暖かい夜具を着せたい」

と夜見店へ参りまして古着屋から小僧さんに麻風呂敷に搔巻に三布蒲団を背負い込ませ、長家の者に知れない様にお父さんに半纏を着せたいと云うので段々と狐鼠く買物をして参りますが、世間じやア直に目が着きます、或る時例の姐子が、

姐「おい勘次や」

勘「えゝ」

姐「奥のお筆さんは良い旦那でも附いたのじやアねえか」

勘「然うでげすね、此の頃は大変様子が宜いから、ね、お父さんなどは何うも少し顔色が違えやして、此の頃じやアにこゝして居やす、私にも此の間手拭を呉れたね」

姐「手拭を貰つたと、何んで貰つたんだい」

勘「何んだつて度々水を汲んでやつたり何かするんで大きに色々お世話に成るつて呉れましたが余り好い心持だから匂いを嗅いだが、些つとも好い香氣はしませんね、矢張り手拭の臭いがした」

姐「あの娘なんぞに何か貰いなさんなよ、何でも旦那が附いたに違えねえノ」

勘「え、何んだか知りませんが、其の旦那てえのが些とも来るのを見た事がねえ、何でも夜中に来るんでげしようよ何処かへ参詣に行くつて時々出えくしたが、何処か知れない処で逢つてお金を貰つて来るんでげしよう、あの親父が此の間髭を剃りましたよ白髪交りの胡麻塩頭を結て新しい半纏を引掛て坐つて居ますが大きに様子が快くなつて病人らしく無く成つたが、娘さんも襦袢に新しい襟を掛けたぜ、好いもんじやア有りやせんが銘仙か何かの着物が出来ておつな帯を締ましたよ、宜い装をすると結髪で働いて居る時よりやア又好く見えるね、内々魚などを買つて喰う様子でげすぜ、此の間も魚屋が来たら何が有る、鱈……それじやア鱈をお呉れつて鱈を買いやした病病人に鱈は宜うござえますのかね」

姐「そんな事を気にしなくつても宜いが何うも様子が訝しい」

勘「私も娘さんの顔が見てえから時々行くんです」

此の勘次が毎日の様に来ては手伝いますから氣の毒だと思つて居ます処へ又来て、

勘「お筆さん水を汲んで上げやしよう」

筆「おや勘次さん毎度有難う」



勘「なにどうせ幾度も汲みに行くんで、宅の姐さんは清潔家でもって瓶の水を日に三度宛も替えねえと子<sup>ぼうふら</sup>子が湧くなんてえ位で、小便にでも行くと肱<sup>ひじ</sup>の処から水をかけて手を洗うてえ大変なものでえへ、どうせ序<sup>ついで</sup>でげすから遠慮するにア及びやせんよ」

筆「誠に毎度有難う」

勘「お父さん今日は……えへ、いえ何う致しやしてどうせ序<sup>な</sup>が有りやすから、でげすねお筆さんは親孝行でお前様<sup>さん</sup>はお仕合せで本当に御運が好いんで、えへ、」

孫「なに然<sup>そ</sup>うでも有りませんのさ」

勘「此んな好い子を持ったのは貴方の御運が宜いのでさア」

孫「なに運が善<sup>よ</sup>い事も有りアしません、今じやア腰<sup>ぬ</sup>が脱けて仕舞<sup>なん</sup>つて何の役にも立たなく成つてますから、併<sup>しか</sup>し毎度有難うございます、娘<sup>これ</sup>一人で何事も手廻りません処<sup>な</sup>を貴方が水を汲んで下さったり、其の上御親切に姐さんが又度々気を注<sup>つ</sup>けて下物<sup>おかせ</sup>を下さり、誠に有難う存じますお蔭で親子の者が助かります、貴方姐さんに宜しく仰しやつて下さいまし」

勘「じやア姉さん汲んで上げよう」

と井戸端へ行つて水を手桶に三杯も汲んで遣りました。

筆「ちよいとく勘次さん少し待つて下さい」

勘「え何なんです」

筆「少し上げたいものが有りますから、手拭の貰ったのがあるんです」

勘「又手拭をかえ……此の間も貰ったのに……」

筆「いえ詰らんですすが持つて行つて下さいよ」

是から千代紙で張はって有る可笑おかしな箱の蓋を取つて、中から手拭を出そうとする時、巾着の紐が指に引懸つて横になるとパラ／＼と中から金子かねが散ちらばつて、お筆が之を隠し手拭を一筋ひとつに一朱銀を一個出ひとつして、

筆「誠に少し許ばかりでございますけれども、毎度御厄介に成りますから」

勘「何う致しまして、是は何うも、えへ、何うもお氣の毒で、誠に有難う」

と礼を云いながら心の中で大層金子かねを持って居やアがると斯こう思いました。口々に分けては有りますが下へ落ちたが二十両許りザラ／＼と云うのを慾張た眼で見ると五六十両も有ろうと思ひました。「此奴こいつア成程姐さんの云う通り何なんでも彼奴あいつは良い旦那どりをしてこつそり金を呉れる奴が有るに違ちがえねえ、彼様あんなけちな千代紙で貼つた糸屑を入れて置く箱ん中の巾着からザクリと金が出るんだからね」と此の勘次と云う奴は流ながれ山やま無む宿しゆくの悪わる漢ごんでございますから、心の中で親父は病氣疲れで能く眠るだろうし、娘も看病疲れで

寝るだろうし、能く寝付いた処へ忍込んであの金子さえ取れば、又西河岸の桔梗屋へ行って繁岡の顔でも見て楽しむ事が出来るという謀叛が起り、其の夜深更に及んでお筆の家の水口を開け忍込んで見ると親子とも能く寝付いて居る様子、勘次は素より勝手を知つて居りますから、例の千代紙で貼った針箱同様の糸屑の這入つて居る箱の中から巾着を盗み出し、戸外へ出ると直に駕籠に乗つて飛ばして廓内へ這入り西河岸の桔梗屋という遊女屋へあがりました。

勘「久しく様子が悪かつたので来なかつた」

馴染の娼妓か、

△「おや鼬の道や」

勘「なに―篋棒めえ、鼬の道だつて、あのな繁岡さんと喜瀬川さんを呼んで呉んな、揚女郎てえ訳ではねえが、私は少し義理が有るから、旨え物を沢山食れ、なに―、愚図ノ云うな、大台を……大台をよ、内芸者を二人揚げて呉んな」

と金の遣い振りが暴い。

亭主「勘次さんは大層金の遣い振りが暴いじゃアねえかのう、喜助」

喜「へえ、何だか博奕に勝つたと被仰います」

と聞いて内証では何うも様子が訝しい、知ってる人だから朝勘定でも宜いんだが、金の遣振りが訝しいから宵勘定に下げて貰え。と下った金を見ますると三星の刻印が打つて有る、是は予て巡達じゆんたつに成つて居る処の不正金でございますから、

亭主「是は打棄うちちやつちやア置おかれない、直すぐに……」

と云うので、是から其の頃の御用聞を呼びまして此の事を話すと石子伴いしこばんざく作様と云う定巡ようまわりの旦那が、

伴「夫は手附それかずに出すが宜い」

と云うので、二日流連いっぢけをさせて緩ゆっくり遊興をさせ、充分金を遣わせて御用聞と話合ひの上で、ズツと出る処を大門外そとで、

○「御用」

勘「ハツ……」

と云つて恟びつくりする、大抵な者は御用聞が御用と云う声を掛けるとペタペタとなるといいます。直すぐに縛すくられて田町の番屋へ引かれる、仕様の無いものでございませう。

○「勘次てめえ汝の身分にしちやア金遣いが滅法あらに暴あえが、桔梗屋つかつで使用つかつした金はありやア何どこ処から持つて来た金だ」

勘「むゝ、彼<sup>あれ</sup>ア、…バ…」

伴「何を愚<sup>な</sup>図<sup>な</sup>く言<sup>な</sup>つて居<sup>な</sup>やアがるんだえ」

勘「へい、何<sup>な</sup>んで、賭<sup>ばくち</sup>博<sup>ち</sup>に勝<sup>な</sup>ちましたので」

伴「なにー、博<sup>ばくち</sup>賭<sup>ち</sup>に勝<sup>な</sup>つたと、馬<sup>てめえ</sup>鹿<sup>え</sup>ア云<sup>な</sup>え、汝<sup>な</sup>の様<sup>な</sup>なケチ<sup>な</sup>な一文<sup>な</sup>賭<sup>な</sup>博<sup>な</sup>をする奴<sup>が</sup>古<sup>こ</sup>金<sup>きん</sup>で授<sup>とり</sup>受<sup>やり</sup>をするかえ、有<sup>あり</sup>体<sup>てい</sup>に申<sup>ま</sup>上<sup>あ</sup>げろ」

勘「マ、全<sup>な</sup>く博<sup>ち</sup>賭<sup>ち</sup>に勝<sup>な</sup>つたに違<sup>ちが</sup>えござえません」

伴「何<sup>どこ</sup>処<sup>こ</sup>の博<sup>ち</sup>賭<sup>ち</sup>場<sup>ば</sup>で勝<sup>な</sup>つたんだ」

勘「ムゝ、カ、カ、神<sup>まき</sup>田<sup>き</sup>の牧<sup>まき</sup>様<sup>さま</sup>の部<sup>な</sup>屋<sup>や</sup>で何<sup>な</sup>んしまして、小<sup>お</sup>川<sup>が</sup>町<sup>まち</sup>の土<sup>つち</sup>屋<sup>や</sup>の…」

伴「黙<sup>な</sup>れ、尋<sup>ま</sup>常<sup>じょう</sup>に申<sup>ま</sup>上<sup>あ</sup>げろい、幾<sup>いく</sup>ら隠<sup>かく</sup>したつて役<sup>やく</sup>にア立<sup>た</sup>たねえから、何<sup>どこ</sup>処<sup>こ</sup>で盗<sup>ぬす</sup>んだか云<sup>い</sup>えよ」

勘「いえ全<sup>な</sup>く其<sup>その</sup>の力<sup>ちから</sup>、カ、勝<sup>な</sup>つたんで」

伴「これ勘<sup>か</sup>次<sup>じ</sup>、汝<sup>てめえ</sup>其<sup>その</sup>様<sup>よう</sup>な事<sup>こと</sup>を愚<sup>な</sup>図<sup>な</sup>く言<sup>な</sup>つたつて役<sup>やく</sup>にやア立<sup>た</sup>たねえ早<sup>はや</sup>く云<sup>い</sup>つちめえ」

勘「いえ…その…全<sup>な</sup>く勝<sup>な</sup>つたんで」

伴「云<sup>い</sup>わねえな、何<sup>なに</sup>うしても此<sup>こ</sup>奴<sup>やつ</sup>ア云<sup>い</sup>わねえから打<sup>ぶ</sup>てく」

○「お慈<sup>めい</sup>悲<sup>ひ</sup>深<sup>しん</sup>い且<sup>ま</sup>那<sup>な</sup>だから本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>の事<sup>こと</sup>を喋<sup>しゃ</sup>つて其<sup>その</sup>の上<sup>うへ</sup>でお慈<sup>めい</sup>悲<sup>ひ</sup>を願<sup>ねが</sup>え、お前<sup>まへ</sup>だつて万<sup>まん</sup>更<sup>ざら</sup>

素人じやアなし、好い道楽者じやアねえか」

伴「ええや、しめろ〜」

とピシーリ〜叩かれるから直に口が開いて、実は五斗兵衛市の処に食客に居る中に裏に小間物屋孫兵衛と云う者が居て、孫兵衛の娘のお筆が私に礼をすると云つて巾着をすべらし、金の出たのを見て不図した出来心から全く盗んだに相違ございません。と白状を致しましたから直に京橋鍛冶町の小間物屋孫兵衛方へ踏込娘お筆が縄に掛けて引かれたは何とも云えぬ災難でございます。何う云う事やら訳が分らず腰の抜けて居る孫兵衛は大屋さん何う云うもんで。と泣いて許り居りますから長屋の者が来ては色々に賺めませぬけれども中々愚痴が止みません。五斗兵衛市の姐御は気の毒でなりませんから、

○「私の処へ無頼な食客を置いたばかりで斯う云う事に成つたんだが、決してお筆さんに其様な理由はない不正金だというが」

孫「イエ金子などが宅に有る気遣いは有りません、何う云う災難ですか、大屋さんお筆を返して下さいませんかと私は小便に行く事もお飯を喰う事も出来ません、お願いでございますから」

とワイ〜泣いて居つたのは然もあるべき事でございます。

扱さてお筆を段々調べて見ますと、親父が大病で商売も出来ず、衣類道具も売うり尽つくして仕様のない所から、每晚柳番屋の蔭へ袖乞に出て居りますと、これくこ斯こう云うお武さむらい士しが可哀想だと仰しやつて紙に包んで下さいましたのを、お鳥目あしかと存じて宅たくへ帰り開けて見ると金子きんすでございました、親に御飯を喰べさせる事も出来ん様な難渋な中ゆえ、遂つい大屋さんに黙つて使いました段は誠に恐入りますという所が、口不調法ではございますが、曲淵甲斐守様が一目見れば孝心な者で有るか無いかはお分りにも成りましよう、殊に勘次の申も立うしたてと符合致して居りますから遺さすの名奉行にも少し分り兼かねました。

甲「全く其の侍に貰つたに相違有るまいが、是は芝赤羽根の勝手ヶ原の中根兵藏なかねひょうぞうという家持いえもち町人の所へ忍入り家尻やしりを切つて盗取ぬすみとつた八百両の内の古金で、皆此の通り三星の刻印の有る古金で有るに依て、其方そちが唯貰つたでは言訳が立たぬ、全く親の為めに其方は其の日に困るに依て一時いちじし凌しのぎに使い、翌日ちようやく町役人とも相談の上訴え出ようと思ふ折柄、勘次に盗取られたに相違有るまいな」

と云うお慈悲のお言葉。

筆「へえ恐入りました、夫それに相違ございません」

甲「うむ、吟味中入牢じゅろう申し付ける」

とピツタリ入牢と相成りました。さア何どうも近所では大騒ぎ、寄ると集さわると此のお筆の評判ばかりでございます、或る人は頻しきりに不承知を唱えまして何しろお上かみはお慈悲だつてえが大違あいだ、彼あ様な親孝行な娘を引張つてつて牢へ入れちまつて、金を呉れた奴ぬすびが盗ぬす人とだか、武家だてえが何うしたんだか訳が分らねえ、物を人に呉れるなら名でも明して呉れるが宜いいんだ、何うしてお筆さんが泥坊などをする様な娘こでない事は誰でも知つてる、夫それに此こんな事になるといふのは私わしには些ちとも訳が分らねえ、お上は盲目めくらだ。という又一人が、

△「其そんな事を云うなよく」

と近所では色々噂をして居る。吉原帰りは田町はまぐりの蛤はまぐりへ行つて一盃いっぱいやろうと皆其の家うちへ参ります。

×「もう是で飯を喰おう」

△「もう一本やろう」



× 「余り遅なるから、丁場の仕事だよ」

△ 「丁場へは兼が先に行つてゐるからもう一本やろう」

× 「兄いは酔つちまつてる、グツと思切つて続けてやんなもう充分酔つてるから飯を喰おうじやアねえか」

△ 「宜いからもう一本交際いねえな、汝が二猪口ばかりアイをすれば、残余は皆己が飲んで仕舞わア：長い浮世に短い命だ：人は：篋棒めえ正直にしたつてしなくたつて同じ事だ京橋鍛冶町の小間物屋のお筆さんの事を見ても知れたもんだ」

× 「兄い彼を云いなさんなよ、余りパツパと云つて捕まつて困つた者が有るから」

△ 「困つたつて癪に障らア、余り理由が分らねえじやアねえか、親父が病気で困つてるから毎晩数寄屋河岸の柳番屋の蔭へ袖乞に出て居る処へ通り掛つた武家が金を呉れたんだてえが、其の位の親切が有るならよ、己は何処の何う云う武家で若し咎められた時にやア己が遣つたと云えつて名前でも明して置ば宜いのに、無闇に金を呉れやアがたつて、情にも何もなりアしねえ、あの何とか云つたつけ巴の紋じやアねえ、三星とか何とか云う印が押して有る古金を八百両何家かで家尻を切つて盗んだ泥坊が廻り廻つて来てそれでまア、彼の親孝行な…」

×「おい／＼悪いよ、其様な事を云つて京橋辺でも係合に成つたものが有るから止しなよ」

△「だつてよ、お上では親孝行の者に御褒美を呉れて、親に不孝をする奴は磔刑に上げられてえじやアねえか、其の親孝行の者を牢人中へ押込んで、腰の抜けた親父一人残して置くてえ家主の根性が分らねえ、お救米でも願つて遣るが宜いんだ、此間も甚公の野郎が涙を溢し乍ら、あの娘は泥坊などをする様な者じゃアねえ彼様な娘はねえつて然う云つてた」

×「おー其んなことを云いなさんなよ、係合になると宜けねえぜ」

と制しても中々聞きません。すると他の一人が、

△「係合いになるつて余り癩に障らア今度奉行が替つたか、一体奉行が理由が分らねえ」

×「おい止せてえのに」

△「云つたつて宜い、なツてえ、糞放め、罪もねえ者を無闇に牢の中へ放り込んで、金を呉れた盗人がふん捕まるまで、牢の中へ入れときやアがつて面白くもねえ、本当に癩に障つて堪らねえや、些つと風が吹くと路次は六ツ限に木戸を締つちまうんで湯が早く抜けちまつても困らア職人は、彼の娘の親父は腰が抜けてるてえから己ア可哀想でならねえ」

とシク／＼泣出しました、

× 「泣上戸なきじょうこだな、泣きなさんなよ、涙を零こぼして見つともねえ鬼の眼に涙だ」

△ 「鬼でも蛇じやでも構あア事まアねえ、余あんなり口惜くやしいから云うんだ」

× 「おい、止せてえ事よ」

話をして居ますると衝立ついたての陰かげからずいと出た武家さむらいは黒無地の羽織、四分一拵しぶいちごしらえの大

小、胸高むなだかに帯を締めて品格ひんの好い男、年頃は廿七八でもありましよう、色白で眉毛の濃

い口許くちもとに愛敬あいけいの有る人物が、

武家 「是は何うも大分だいぶん機嫌きげんだのう」

△ 「えへ、ははは殿様………御免なさい、隣席となりにお在いでとも存じやせん」

武 「いや衝立の陰で先刻さつぎから一盃いっぱいやつて居た、職人のお前達の話は又別段で」

△ 「えへ、ははは旨旨く云つてらつしやるね」

× 「殿様御免なすつてから大きな声をして、此奴こいつア少し喰くらい酔よってるもんですから詰つまらん事を云つて、何卒どうぞお構あいなく彼方あちらへお出でなすつて」

武家 「あは、ははは馳走ちそうになろう、合あをしよう、もう一銚子ちやうし付けさせろ、身共も一盃馳走ちそうに成ろう」

△「えへ、旨く云つてらア、殿様は如才じよさいねえや、巧うめえや」

武「酌を仕様」

×「いえ殿様、此方こつちでします」

武「いや酌をしよう」

△「えへ、是は有難うございます、何れお浮れでございませぬ、昨夜ゆうべ廊内ななかへ行つて」

武「うむ、廊内へ行つて来た」

△「えへ、殿様なんざア男が好よくつて美いい扮装なりだからもてやすが、私わつちどもはもてた事はなく振られてばかり居ても行き度たえから別段で」

武「何うだ猪口ちよくを貰おう」

△「御免なせえまし、水を貰いましょう、おい女中茶漬茶碗へ水をよう、なツてえ、宜いから黙つて居ろい」

武「水などで灌そいでは水臭い、其んな事をせんでも宜しい」

×「兄い止しなよ」

△「宜いよ黙つて居ろえ」

武「是は何うも、酒の嗜すきな者は妙なものだ、が今聞いて居たが、何か其の京橋へん辺の数

寄屋河岸の柳番屋の陰で金子を貰った娘が有るとか云う話だが、それは何う云う訳だ」と云われた時は兩人は驚きわな／＼しながら。

△「へえ」

×「だから止しねえと云ったんだ大きな声をしてパツパと云うから宜げないんだ」

武「何も心配な事はない何かえ夫れは」

△「へえ……誠にどうも、喰え酔って居まして大きに不調法を致しました、眞平御免なさいまし」

武「いや不調法な事は些ともない、柳番屋の処へ袖乞いに出る娘に武家が金子を遣ったんだな」

△「へえ、何うも明瞭り分りませんので」

武「いや分らん事はない、今お前が話をしたではないか、何と云う者の娘だえ夫れア」  
 ×「殿様此者は喰い酔って居まして唯詰らねえことを云ってたんで出鱈まえて、唯茫然、変な話なんで、嘘を云ったんで」

武「なに嘘のことはない、何も心配になる事はないから、私に聞かすれば宜いのだ、京橋の何処の者だえ……」

△「へえ」

武「云わんか、いま貴様が云った事は衝立の蔭で聞いて居ったが、少し調べる事が有るから聞くのだ」

×「だから己が先刻さつきから、斯こう云うことを云って係合に成ったものが有るから大きな声をして云うなと云うのだ」

△「本当に殿様ア……私わっちア明瞭り知らないんで」

武「知らんたつて只今云ったじやアないか、何なんとか娘の名前まで云ったぞ」

×「へえ……」

武「云わんか、云わんと云えば免ゆるさんよ、隠立てを致せば捨置かれんから兩人共近所に自身番が有ろうから夫れへ連れて行く」

×「真平御免なさい」

△「何うぞ真平御免を」

武「謝罪あやまらんでも宜い、貴様達の罪じやアない、云いさえすればよろしいのだ」

×「へえ、京橋……鍛冶町」

武「うむ、京橋鍛冶町、少し待って呉れ」

と腰から矢立を出し懐中から小菊を出して、

武「京橋鍛冶町で、何と云う者の娘だえ」

「孫右衛門娘で筆でございます」

武「孫右衛門の娘の筆か、此の月の幾日の晩だ、うむ、成程六日の晩数寄屋河岸の柳番屋の蔭に於いて金子を貰ったのか、其の金子は幾ら有った」

△「何だか其処の処は明瞭り分りません」

武「夫を何者が盗んだと云ったな」

△「へえ、それは五斗兵衛市の家の居候で勘次てえ奴が」

武「五斗兵衛市てえのは名か、可笑しいな、其の家の食客に居るものだな」

△「いえ、なに居候で」

武「だからよ、勘次と云う者が盗み取つてそれが露見をして目下其の娘は牢に居るんだな」

△「へえ牢に這入つちました」

武「それは可哀想な事で、町役人は何と云う」

△「町役人と云うと何う云う事で」

武「いえさ家主いえぬしだよ」

×「家主と云うのは何んで」

武「其の長屋の差配を致す者よ」

△「大屋でげす」

武「大屋てえ事はないが、まア大屋でも宜よいその大屋は」

△「へえ、と藤兵衛」

武「藤兵衛か、宜しい、貴様の名を一寸書いて置こう、貴様は何と云う名だ」

△「へえ御免なすつて」

武「謝罪あやまらんでも宜いい」

×「え、殿様、此者これは全く喰くらい酔よつて迂濶うっかり云つたんで」

武「喰い酔うも何もない名前を云え、云わんか」

△「へえ大変だな、熊ツ子てえます」

武「熊ツ子と云う名前はない、熊吉か熊五郎か何うだ」

×「へえ慥たしか熊五郎」

武「慥か熊五郎と云う奴があるか、貴様は何んと云う名だ」



× 「私も……私は何も云やアしません」

武 「何も云わなくとも連れだから云えよ」

× 「何うぞ御免なすつて」

武 「ゆるせと申したつて連れだから貴様の名も書かなければならんよ」

× 「へえ……私ア、ガチャ留とめと申します」

武 「ガチャ留と云う名が有るか」

留 「何だか知りませんが子供の時分から、ガチャ留なんツてえます」

武 「留吉か留次郎か」

留 「其処そこの処は私わっちどもの事ですからガチャ留でお負けなすつて」

武 「負けると云う事はない、留吉か全く」

留 「えへ、忘れしました」

武 「自分の名をわすれる奴があるか貴様達は最もう宜しい」

兩人 「有難う存じます」

と兩人は直すぐに駈出して小田原迄逃げたと云うが、其様そんなに逃げなくつても宜しい。此の武家は莞爾にっこり笑つて直其の足で京橋鍛冶町へ参りました。又、親父の孫兵衛は只おろく泣

いてばかり居ます、家主も誠に氣の毒で間が有れば時々見舞いに来ます。

家「はい御免よ孫兵衛さんお前そ然う泣いてばかり居ちやアいけないよ、其様そんなにくよくよしたつて仕方がない、是はお前何うもその、悪い事は悪いこと、善よし悪あし共にお上かみは明らかにお調べなさる処だから、全体お前大金を貰った時にねえ、ちよいと私にでも話をすればすく直に訴えて仕舞えば何も仔細ないのだ、彼の娘は他人の物を取る様な娘じやアないが、私の長家から縄付きに成つて引かれる者が有つては家主の恥辱はじだが、なに彼の娘はお前を大切にして親孝行な子だから、何どんなそれおんみつがたおんみつが来て調べたつて長い間のお前の煩いを介抱した様子から皆世間みんなで知つて居るから早晚いまに彼の子も罪が免ゆるりて帰れようから然う泣いてばかり居ちやアいけない、身体に障ると悪いから余あんまり心配をせぬがいゝ」

## 九

親父は涙をこぼしまして、

孫「はい、有難わたくしう、私は此様な業ごうびよう病びょうに成りましたもんだから、彼あれが私を介抱するので内職も出来ませんゆえ追々其の日に追われ、何も彼かも売尽して仕方がない処から、彼が

私に内証で袖乞に出る様な事に成ったので、斯う云う災難に出会ったかと思ひますと、私  
 が彼を牢へ遣った様なものでございます、然うして此の寒いのに牢の中へ這入りましては  
 貴方は助かる氣遣いはございません、織細い身体ですから、其の上今迄引続いて苦勞ば  
 かりして居りますので、身体が大概傷んで居ります処へ又牢へ這入り寒い思いをして、彼  
 に万一の事でも有りますと、私は此の通り腰が抜けて居る、他に身寄頼はなし死ぬより他  
 に仕方がございません、お家主さん貴方何卒筆がお免しに成つて帰れる様にお願ひなすつ  
 て下さいまし」

家「願うと云う訳にやアいけない、素より家尻を切つて取つた八百兩の内の金子だと云  
 うから、何れ其金を呉れた奴が有るんだろうが、其奴が出さえすれば宜いんだが、お調べ  
 が容易に届けば宜いが、調べが届きさえすれば彼の娘は帰るんだからね、是も災難だ」

孫「災難だつて此様な災難が有る訳のものじゃア有りません」

家「お前が困るなら宅の奴も来るし、又長家の者も世話をして呉れるから然う泣いてば  
 かり居ちやア身体が堪らねえ」

孫「え、神も仏もないんで、此様な災難に罹るてえのは、あゝ私は死にたい」

家「其様な氣の弱い事を言つてはいけない、いか程死度いからつて死なれる訳のもので

はない」

と頻りに宥めて居る処へ、門口から立派な扮装をして、色白な眉毛の濃い、品格と云い容子と云い先ずお旗<sup>はたもと</sup>下なら千石以上取りの若隠居とか、次三男とか云う扮装<sup>こしらえ</sup>の武家がずつと這入つて参り、

武「御免小間物屋孫兵衛さんのお宅<sup>うち</sup>は当家<sup>こつち</sup>かえ」

家「はい、是は入らっしゃいます、是は入らっしゃいます」

武家「はい、御免を」

家「其処<sup>そこ</sup>は濡れて居りまして誠に汚のうございですが、サ、何うぞ此方<sup>こちら</sup>へ入らっしゃいますして……奥の喜兵衛さんが願つて呉れたのだから……誠に有難う存じまして、斯ういう貧乏人の処へお出でを願ひまして恐入りますが、能く来て下さいました、貴方は奥の喜兵衛さんから願ひました、番町のお医者様で」

武「なに私は医者じゃアないが、貴方は何かえ、此の長屋を支配なさる藤兵衛殿と仰しやる仁<sup>かた</sup>かえ」

藤「へエく、へエ」

武「今御尊家<sup>ごそんか</sup>へ出たよ」

藤「私の宅へ入つしやいました、左様ですか、え、此者がその孫兵衛と申す者」

武「はい始めまして、え、承れば当家でもとんだ災難で、何かその数寄屋河岸の柳番屋の蔭へ袖乞いに出た娘に、通り掛つた侍が金子を呉れて、それが不正金で親子の者が、凶らざる災難を受けたというは気の毒な事で、お前は嘸かし御心配な事で」

藤「へえ誠に心配致して居りますので、何うか分りますれば宜いと思つて居ります」

武「いやそれは心配には及ばん、明日私が其のお筆さんと云う娘を町奉行所へ訴え出て帰れるようにして遣る、其の金は己が遣つたんだ」

藤「へえー、左様で、それなれば何も仔細無い事で、何かお上でもお疑いがございました、不正金とか何とか云う事を申すので困りましたが、誠にどうも殿様が下さいましたのなら何も仔細は有りません、孫兵衛さんお前さん一寸御挨拶を」

武「はいお父さんか始てお目に懸つたが実は日外私が数寄屋河岸を通り掛るとお前の娘子が私も親の病中其の日に困り親共には内々で斯様な処へ出て袖乞をすると言つて涙を溢して袖に縋られ、誠に孝行な事と感服して聊か恵みをしたのが却つて害に成つて、不図災難を被せて気の毒で有つたが、明日私が訴えて娘子は屹度帰れる様にして上げるが、名前も明さずに金子を遣つた処は誠に濟まんが、明日は早々にお筆さんの帰れる様にして

上げるから、金子を遣つて苦勞をかけた段は免して下さい」

藤「何う致しまして、有難い事で、お礼を云いなよ、殿様が下さったんだから心配はない」

孫「はい、誠に有難う、心の中で私は一生懸命に観音を信心致しました、どうも昨夜貴方少しうとく致しまして夢を見て、観音様が私の枕辺に立って、助けて遣るぞ助けて遣るぞと仰しゃいました、目が覚めますと矢張り宅に寝て居ったので、不断其の事ばかり思つて居るから観音様の夢を見たのだ、あゝ観音様も分らねえと神や仏を恨む様な愚痴を云つて居ましたが殿様が出て己が遣つたと云つて下さいますればお上に於いてもお疑いは無い事で、お筆は免されて帰れますが、少しも早く、成ろう事なら今晚帰る様に」

武「今日は些と遅いから明日屹度帰す、是は誠に心ばかりだが……娘は明日屹度取戻してお前の家へ帰るようにして上げるが、此金は真の心ばかりだ、是は決して不正金でも何でもない仔細の無い金子だから、どうか心置きなく使つて下さい、私が遣つたに違いない」

藤「誠に恐入ります、是は何うも娘を帰して下さるのみならず多分の金子を……」

武「いや沢山はないたつた十金だから、何ぞ暖い物でも買つておあがり」

藤「是は恐入ります、おい孫兵衛さん旦那様が十兩下さつたよ」

孫「十両よりはお筆を早く帰して下さい」

藤「そんな事を云うものじゃアない親父は少し取逆上とりのぼせて居ますので」

武「え、お家主一寸自身番まで一緒に行つて貰いたい」

藤「へえ、自身番は直其処すくそこで」

武「少し御相談が有るから、じゃアお父さんとつ私は帰る、明日屹度あしたお筆さんを帰すよ心配しちやアいかん、心を確しつかり持つておいで、大丈夫だから」

藤「はい有難う存じます、又た多分まのどうもお恵みで有り難う存じます」

武「さ、行きましょう」

藤「へえ、じゃア宜いいかえ孫兵衛さん、今宅たくの何をよこすから、旦那と一緒に自身番まで往つて来るから、此方こちらへ入いらつしやいまし、板いたががた付いて居ます、修なおそうと存じて居ますが、遂つい大金が掛りますので、何卒どうぞ此方へ」

武「はい〜」

是から路地を出て町内の角の自身番まで参り、

藤「誠に爺嗅い処で、どうか此方へ」

武「いやもう構つてお呉れでない心配をせんが宜よろしい、え明日私あしたわしが奉行所へ出て私が

金子を遣つたに相違ない事を訴えれば、仔細はない、が長屋に事の有る時は支配を致して居る処のお家主の御迷惑はお察し申して居る」

藤「へえ実は私も心配致して居ましたが、殿様が遣つたと仰しやうて下さいますれば何も仔細ない事で」

武「明日は少し早く四ツ時分から腰掛へ出て居て貰い度い」

藤「へえ〜四ツ時分からへえ成程」

武「え、此の近辺でなんですかえ、金満家は何処ですな」

藤「え、金満家と申しますと」

武「いえさ、町内で金満家の聞えの有る家は」

藤「左様でございますなどうも太刀伊勢屋などは大層お金持だそうで」

武「他には」

藤「質屋で伊勢銀と云うが有ります」

武「じゃア伊勢銀の方に仕様」

藤「是からお出でに成りますなら御一緒に参りませうか」

武「いや一緒に行かんでも宜しい、エ、明日お筆さんをお前が引取に來なければならん



から、組合を連れて印形持参でお出を願ひ度い」

藤「宜しゆうございます、承知致しました」

武「あれは天正金で有るか無いかは明日出れば分ります、大きに御厄介で有った」

藤「まアお茶を」

武「いえ宜しい、左様なら」

すうつと歸つて仕舞いましたから何だか家主にも薩張分りません。家主の藤兵衛はあれ程の殿様だから嘘も吐くまい、併しよもやあの人が盗賊では有るまい、それにしても何う云う事であるの金が彼の人の手に這入つたか、と考えて見たが少しも分りません、まさか彼奴が盗賊なら私が泥坊でござると云つて奉行所へ出る氣遣いは無いが何うしよう。と町代の與兵衛という者と相談の上で四ツ時に町奉行の茶屋に詰めて居ります。四ツ半に成つても来ません。

與「藤兵衛さん」

藤「え、」

與「何だかお前の云う事は当にならねえ、未だ来やアしねえ、何んだか変だぜ」

藤「だつて誠に品格の好い、色白な眉毛の濃い、目のさえ／＼した笑うと愛敬の有る

好い男の身丈せいのスラリとした」

與「男振おとこや何かは何うでも宜よろいが是こゝは来きないぜ」

藤「然さうですな、おやお隣町内の伊勢銀さん何うです」

芳「なに盗賊どくさが這入りまして金を二百両盗ぬすまれましたから訴うえるんで、宅うちは大騒おどろぎです」

藤「昨夜ゆうべ盗賊どくさが、へえー、何処どこから這入りました、家尻いへを切きつたつて、へーえ何うもそれはとんだ事ことでしたな、お代だいに芳造よしぞうさんですか、それはまア不とんだ凶とんだ御災難ごさいなんで」

芳「へえ、酷ひどい目に遭あいました」

藤「少しも知りませんでげした」

芳「土蔵どくらや何かは余程あま氣きを注つげますんですが」

藤「へえー」

と話わをして居ゐります処ところへ件の武家ぶけが雪駄ゆきだでチャラリ／＼腰掛こしへ這入はいつて来きました。

藤「おや是こゝは入はいらつしやいましそれ見みなせえ嘘うそう吐はくものか入はいらつした、さどうぞ此方こちら

へ」

武「昨日けふは色々お世話せわに……今こん日は早くから出でようと思おもつたが少々余儀あまない事ことで友達ともだちに逢あつて暇いとま乞こいなどをして居ゐたんで少々時刻じこくが遅おそれてお待まちたせ申まして済すまみません」

武「え、此のお方は」

藤「え、組合の名主代で」

武「大きに御苦労」

與「えへ、町内の小間物屋の娘をお助け下さり有難う存じます」

武「はい御奉行のお退出さがりまでは未だ余程間あいだが有ります」

藤「え、殿様一体あの一件は何う云う事なんで、へ、附かん事を伺います様だが、何う理由わけかあの金子きんすをお上では不正金だつて、三星の刻印が打つて有るなどと申します  
が」

武「うむ、彼金あれは芝赤羽根の中根兵藏方の家尻を切つて盗んだのが丁度十二月十二日の  
晩でね、八百両取つたんだ」

藤「へえ、其の盜賊が知れませんでした」

武「いや其金それを取つた賊は拙者だ」

藤「えへ、御冗談を、えへ、」

武「いや全くだ、何うも、悪い事を誰も知らん者は無い、賊を働くは悪い事で天道に背  
くとは思ひながら、知りつゝ此の賊になるもねお家主、是は皆前ぜん生せいの約束事かと思ふ、

悪いから止めようとしても止められんね、これは妙なもので、十四の時から私は盜賊を為ます」

藤「えへ、御冗談ばかり」

武「いや冗談じゃアない、実は中国の浪士で両親共逝去なつて伯母の手許に厄介に成つて居つたが十四歳から賊心を発して家出をなし長い間賊を働いて居つたが是まで知れずに居つたのだがね」

藤「へえー全く殿様が」

武「あい、何うも止めようと思つても止められんものだね、私が取つた金を遣つたんだと斯う云つて出れば、お筆さんの助からん事は有るまい、私も長らく他人の物を盜み取つて旨い物を喰い好い着物も着たが、金子を沢山取つた割合には夫程榮耀はせんよ、皆な困る者に恵んだ方が多い、可哀想だと思つては恵み、己の罪を重ねる道理だから止そうとは思ひ、止められんと云う処が是が因果じゃな、前世の約束事で有ろう、もう天命を知りこゝらが丁度宜い死に処だ、私は廿九に成りますよ」

藤「へえー、えへ、へえー」

武「名乗つて出てお上の御処刑を受けた跡でお題目の一遍も称けてお呉れ」

藤「へえ、途方もない御冗談ばかり」

武「いや冗談じゃア無い全くだ、其方そちらのお方は」

藤「是は伊勢銀と申す町内の質屋の手代でですが、昨晚盗賊が家尻を切りましたので今日こんにちお訴えんにちに参つて居りますので」

というとき武さむらい士は平気で、

武「左様か直すくに分りますよ、昨夜お前さんの処の家尻を切つたのは私わしだよ」

芳「え、貴方、へえー」

武「それは気の毒千萬な、お手数をかけて、全くはお家主が彼家あそこは金持だどのお指図で

……」

藤「私わたくしは其んな事は云やアしません、驚いたなア」

何うも沈着おちついたもので、是から八ツの御退出おさがりから一同曲淵甲斐守公のお白洲へ出ました、

孫兵衛の娘お筆も引出ひきだされ、訴えの趣きを目安方が読上げますと甲斐守様がお膝を進められました、

甲「備前岡山無宿月岡幸十郎つきおかこうじゅうろう」

幸「へえ」

甲「其の方が訴え出でたる趣きは十一月廿二日の夜芝赤羽根勝手ヶ原中根兵藏方へ忍び入り、家尻を切つて八百両盗み取つたる金子の内を、数寄屋河岸の柳番屋の蔭に於て是なる筆に恵み与えたるに相違なく、筆には毛頭罪なき事であればお免しを願ひ度趣を訴え出でたるが全く其の方が盗み取つたる金子を是なる筆に遣わしたに相違ないか」

幸「え、先夜は私が柳番屋の蔭を通り掛りますると、是なる筆が私の袖に縫つて涙を零しながら頼みます故、何故袖乞をするかと尋ねましたら、父が長らくの患ひ、腰が抜けて起居も自由ならず商売も出来ませんので其の日に追われ、僅な物も売尽して仕方がなく明日米を買つて与える事が出来ませんと、真に袖を絞つて泣いての頼み、真実面に頭われしましたから、あゝ感心な事じやと存じまして、遂刻印金とは存じて居ながら、是なる娘に恵み与えました金子が却つて娘の害と成りまして、長らく病んで居ります処の親を一人残して入牢仰付けられたは如何にも筆へ対して手前氣の毒な思ひを致しました、筆には決して科のない事でございますから何うか町役人共へお引渡しに相成りますれば有難い事に存じます」

甲「うむ、是れなる筆に何両の金子を遣わした」

幸「え、其の勘定は確と心得ませんが五十金足らずかと心得ます、唯小菊の上へ掴み出

して与えました事ゆえ勘定は確とは心得ませんが、残余あとの使い高に依つて考えますと五十金足らずかと心得ます」

甲「うむ、此の者に貰つたに相違ないか、面体めんていを覚えて居るか」

筆「其の夜よは頭巾を被つて在いらつしやいましたからお顔は覚えませんがお声で存じて居ります、頂いたに相違ごぎいません」

甲「うむ、町役人」

藤「へえ」

甲「此の筆なるものゝ父は長らく病中夜分よるもおちくゝ眠りもせずに見病を致して、何も角も売尽し、其の日に迫つて袖乞に迄出る事を支配をも致しながら知らん事は有るまい、全く存ぜずに居つたか」

藤「遂つい心附かずに……」

甲「呆たわけ、其の方支配を致す身の上で有りながら、其の店子たなごと云えば子も同様と下世話で申すではないか、其の子たる者の斯かる難儀をも知らんで居おるといふ事は無い、殊には近辺の評も孝心な者で有ると皆々が申す程の孝心の娘なれば、其の方心に掛けて筆を助けて遣らんければならぬ、夫それが手前の役じや、貧に迫つて難渋なれば難渋の由を上へ訴えてお救すくい

を乞うとか何とか訴出れば上に於て御褒美も下し置かれる、然るを打捨て置いて袖乞に出る迄の難渋をかけると云うは、其の方不取締ふとりしまりで有るぞ」

藤「お……恐れ入りました」

甲「筆其の方は見ず知らずの者より大金を貰い受け、紙を披ひらいて見たら多分の金子が有ったなら、早々町役人同道にて上へ訴え出なければならん処を、隠し置いて其の金を使いしは不届至極で有る、けれども其の日々に差迫つて、明日みょうにちは父に米を買つて与える事も出来ぬ処から、其の金子を以て米薪に代えて父を救つた其の孝心に依よつて父を思う処から、悪い事とも心附かず迂濶うっかり其の金を使い是から家主と相談の上で訴え出ようと云う心得で有ったが、其の中に勘次郎うちという者が其の方の手許に金子の有る事を知つて盗み取つたが、全く訴え出ようと心得て居おる内に其の金を取られたので有ろうな」

とお慈悲な事でございます。

十

お筆は漸々ようく顔を上げまして、



筆「はい左様で」

甲「何<sup>ど</sup>うじや町役人<sup>まちやくにん</sup>」

藤「全くは是から訴えようと内<sup>ない</sup>々<sup>く</sup>下<sup>した</sup>話<sup>ばなし</sup>もございましたので、処を盗み取られまし  
たんで」

甲「これ下話が有つたら何故<sup>なぜ</sup>訴えぬ」

藤「いえ是から下話を致そうかと考えて居りましたんで」

甲「なんだ、筆なる者は罪もなく殊に孝心な者故助け度<sup>た</sup>いとて訴え出でたる幸十郎は最<sup>い</sup>  
と神妙の至りで有る、筆儀<sup>ぎ</sup>は咎<sup>とが</sup>も申し付けべき処なれども、其の親孝心に愛<sup>め</sup>で、上に於て  
も格別の思召<sup>おぼしめし</sup>を以て此のまゝ免し遣わす、立ちませえ」

筆「はい」

と立とうとする途端にびいんという仮牢の錠の開く音が頭上に響いて、恟<sup>びつ</sup>りする中<sup>うち</sup>に大  
戸をガラ／＼と開けて仮牢から引<sup>ひ</sup>出<sup>い</sup>されましたは、禿げた頭の月代<sup>さかやき</sup>は斑白<sup>まだら</sup>になりまし  
て胡麻塩交りの髭<sup>ほ</sup>が蓬<sup>ぼう</sup>々々生え頬骨が高く尖り小鼻は落ちて目も落<sup>おち</sup>凹<sup>くぼ</sup>み下を向いて心の  
中<sup>うち</sup>に、或<sup>わく</sup>遭<sup>そう</sup>王難<sup>おうなん</sup>く、臨<sup>りん</sup>刑<sup>けい</sup>愆<sup>いん</sup>、臨<sup>りん</sup>刑<sup>けい</sup>愆<sup>いん</sup>、壽<sup>じゆ</sup>終<sup>しゆう</sup>、念<sup>ねん</sup>彼<sup>び</sup>觀<sup>かん</sup>音<sup>いん</sup>力<sup>りき</sup>、刀<sup>とう</sup>尋<sup>じん</sup>段<sup>だん</sup>々<sup>ん</sup>壞<sup>わい</sup>、或<sup>わく</sup>囚<sup>い</sup>禁<sup>きん</sup>枷<sup>か</sup>鎖<sup>さ</sup>、手<sup>しゆ</sup>  
足<sup>く</sup>被<sup>び</sup>杻<sup>ちゆう</sup>械<sup>がい</sup>、念<sup>ねん</sup>彼<sup>び</sup>觀<sup>かん</sup>音<sup>いん</sup>力<sup>りき</sup>、釈<sup>しゃく</sup>然<sup>ねん</sup>得<sup>とく</sup>解<sup>げ</sup>脱<sup>だつ</sup>、と牢<sup>な</sup>の中<sup>なか</sup>でも觀<sup>かん</sup>音<sup>いん</sup>經<sup>きやう</sup>を誦<sup>よ</sup>んで居たが

今ヒヨロ／＼と繩に掛つて仮牢から引出ひきだされるを見ますると、三年以前に別れた実父の下河原清左衛門でございますから何う云う訳で此の有様はと、はツと思ひまして、

筆「お父とつさん」

と云い掛けると清左衛門が、むゝと眼で知らせますから、

筆「はい」

と泣き度たい程かなし悲いのを耐こらえて砂利の処へぺたぺたと坐りました。明奉行めいぶぎようだから早くもそれと見て取つて、

甲「筆暫く控えろ」

筆「はい／＼」

甲「是なる浪人者を其の方は見知り居おるか」

筆「はい、い、え」

甲「隠すな、隠すと為にならんで、是なる浪人下河原清左衛門は、長谷川町の番人喜助を毒殺致した罪に依つて長らく入牢仰せ付けられ、再度の吟味に逢いつと雖いえも白状致さぬ、毛頭覚えはないとのみ、然しかれば主名を明かせと云えば武さむらい士の道が立たん、士道が立ち難いに依つて主家のお名前は仮令たとえ身体が碎けても白状を致さぬと申し張つて居おるが、是は其

の方の伯父か」

筆「いゝえ」

甲「父か」

筆「いゝえ」

甲「何故隠す、主家の名前を申せば免して遣わす、其の方見知りの者で有れば申せ此の者が助かる事で有るぞ、其の方は元築地辺に居つて何か災難に依つて入水致した処を助けられたのが只今の孫右衛門で有る由上に於て篤とくと其の辺は調べが届いて居る、孫右衛門は養父じゃな、是なる清左衛門は其の方の実父で有ろう」

筆「はい、……いゝえ」

云わんと致しますると清左衛門が目で知らせるから口を開く事が出来ません。

甲「何故言わぬ、此の者は其の方と面体恰好が能よう似て居おるぞ、其の方が強して隠すと此の者は重き刑に行われるが、其の方の実父なれば、清左衛門の口から士道立ち難よいに依よつて申せまいが、其の方が申すに仔細はない、其の方の実父ならば実父だと申せば宜しい、実父と申すが悪いならば此の者の主家の名前を申せ、其の方が申すに仔細は無い事で有る、何処どこまでも云わんで居ると此の儘此の者を無実の罪くるしに苦むるは不孝で有ろうが」

筆「はいく／＼申し上げます」

側から藤兵衛が低い声で、

藤「云いなよ／＼、あゝやってお柔かに仰しやる事だから、云わないと宜けないよ、隠し立てをしちやア彼方も盗賊、此方も盗賊、然う幾らも盗賊と心易くしちやア困るから云いなよ」

筆「はい、実は私の血を分けました親共でございます」

と白状を致しました。其の時御奉行は、

甲「うむ、然うじやろう、何れの藩じや主名を申せ」

筆「はい、巢鴨傾城ヶ窪の吉田監物の家来下河原清左衛門と申す者でございます」

甲「うむ、何故屋敷を出て浪人致した、主人の不興でも受けて追放を仰せ付けられたか何う云う事じや」

筆「少々御主人様の事に就きまして親共が諫言を申した事がございます、其の諫言が却つて害に相成りまして不興を受けてお暇になりましたが、父は物堅い気性故、仮令主でも家来でもお家の為を思う者を用いなければ止むを得んから主家を出る、飢死しても此の屋敷には居らんと、重役の者と争論を致しまして家出を致しまして四ヶ年程浪人致し

て居りました」

甲「うむ、主家に何の様の事が有ったか其の方弁まえて居るか」

筆「深い事は存じませんが、御妾腹の」

と云い掛けると清左衛門が顔で頻りに電光をして居ります。

甲「清左衛門控えろ、此の者が申すに仔細はない、其の方が口外致せば故主の非を挙る事になるかもしれんが、筆の孝心より申すのじや仔細はない、控えて居れ、ふむ、主家の妾の腹に宿した子が有ったと」

筆「はい、お妾の腹に出来ました鐵之丞と申します者を世に出だそうというお妾の悪計に付きました者もございまして、御本腹の金之丞様を毒害しようと云う悪計もございましてと云う事は薄々聞きました事で」

甲「うむ、其の方に叔父が有るか」

筆「はい、ございます」

甲「是なる清左衛門の兄で有るか弟か」

筆「弟でございます」

甲「うむ、それはまだ監物の屋敷に居るか」

筆「未だ居るでございましょう」

甲「吉田監物家来下河原清左衛門、其の方は武士道が立難いに依つて身体ひしびしおの醜みにくになり骨が砕けても云わんと申したが娘が親を助け度いと云う孝心から此の事を申したのじやから其の方に於おて武士道の立たんと申す事は聊いさゝかもない、筆、叔父の名は園そのはちろう八郎と申すで有ろうの」

筆「はい園八郎と申します」

甲「能く申した今こんにち日は此の儘下げ遣わす、こら町役人ちようやくにん筆を確しかと預け置くぞ、明みよう

日にち改めて呼び出すから左様心得ろ」

○「畏かしこまりましてございます」

甲「双方立ちませえ」

と云うので双方ともに起ち、下河原清左衛門は仮牢へ這入り、お筆は町役人が預かつて帰りました。孫右衛門の悦びは一通りでありませぬ。翌日になりますと、新吉原町辨天屋祐三郎抱え紅梅なつび并ならびに下河原園八郎という清左衛門の弟をお呼出しに相成るといふ一寸一息つきまして。偕さて其の次の日は、吉田監物家来下河原園八郎がお呼出しに相成り、縁側の処へ上かみしも下かみしも無刀で出て居ります。曲淵甲州公は御席ごせきに就きましたが、辨天屋の抱え紅梅は白

洲迄は出て居つたがまだお呼び込みにはなりません。

甲「吉田監物家来下河原園八郎」

園「はつ、罷出まかりいでました」

甲「其の方は三ヶ年以前の十一月三日、長谷川町の番人喜助に銘酒じやと申して徳利とくりを持参致して毒酒を置いて帰り候由、番人喜助の女房梅なる者より訴えに相成つて居おるが、夫それに相違有るまい、何どうじや」

之を聞くと園八郎は額へ青筋を出しまして顔色かおいろを変え、袴の間へギユツと手を入れて肩を張らし、曲淵甲州公の顔を昵じつと見詰めて居りましたが、

園「是は怪けしからん仰せにござります、長谷川町の番人に毒酒を与えましたなどと云うは毛頭覚えない事でございます、怪けしからんお尋ねを蒙るもので」

甲「控えろ、其の方如何様いかように陳ちんじても天命は遁のがれ難い事ことで有る、其の方は監物の妾村むらと申す者と密通致し、村の腹へ宿したる鐵之丞を家督に直さんが為に、本腹の金之丞たぐみへ毒薬を授け金之丞を毒殺致して妾の腹に出来たる鐵之丞を家督に直さんという企たくみを致した事は上に於て篤と調べが届いて居おるぞ」

園「是は何うも思い掛けないお尋ねを蒙りますもので何故なにゆえに左様な事を」

甲「黙れ、其の方如何様に陳じてももう遁れる道はないわ、辨天屋祐三郎抱え紅梅を呼よびだせ」

是から紅梅が出て来ましたが娼妓などは立派に着飾つて出るもので、お白洲に出るような姿ではない。前ぜん申し上げます通り阿古屋あこやの琴こと責せめの様な姿かんざしで簪かんざしを後光の様に差さかざして居るから年を取つて居ても若く見えます。ずいと出まして、御奉行の方はすを斜はすに向いて坐つて居ります。

甲「辨天屋祐三郎抱え紅梅、勇之助代かや、差さし添そうたか」

かや「差添さしそいましてございます」

甲「其の方亭主喜助に毒酒を置いて参つた侍は是なる侍で有ろう、篤と面体を見い。近う寄つて面体を見い」

ずいと来て、

紅「あらまア何うもまア凶々しいじやア有りまへんか、あんな高い処あがに昇あがつて真面目な顔かみしもをしてえて上かみしも下しもを着てえてさ、何なんだツて此んな悪党なんに上下なんぞなんぞを着せて置くんですよ、牢の中へ入れたんじやア有りまへんか」

甲「いや前に取押えて入牢申し付けたは清左衛門と申す者じや」



是から清左衛門をお呼出しに相成りまして、

甲「兄弟で有るから能く肖て居るが、能く見ろ違うて居るだろう、篤と面体を見定めよ」といふ御沙汰で、紅梅は熟々、両方を見較べて清左衛門に向い、

紅「まア何うも濟まない、堪忍してお呉んはないよ、肖てえるつたつて本当に能く肖て居るんだものを、成程貴方の方が少し老けて居りますが余り能く肖て居るからお前はんだとばかり思つて濟まない事をしましたが、此ん畜生、宅の人に毒を盛つて是はお上のお上の御酒だから惜しいんだなんと云やアがつて、そんな高い処に上げて置かずに此処へ下してお呉んはないよ、私やアしがみ附くよ」

甲「控えろ、仮令三寸不爛の舌頭を以て陳じても最早逃れられぬぞ、是なるは番人喜助の女房梅で有る、見覚えが有るか何うじや」

と云われ流石の園八郎も差迫つて紅梅を見てこう下を向いて居ります。

甲「何うじや、是にても尚陳ずるか、相違有るまい何うじや」

園「え、恐入りましたてございます」

甲「縄打てえ」

と云うとトンと縁から下へ突落されると直にバラ／＼と来て縄を掛ける。最早遁れる

道はない、毒薬を盛つたに相違ないと云う事が速かに分りましたから、此の者は主殺しに当りますから、磔刑になるべき処を、吉田監物の家が断絶になるから家事不取締りで、此の園八郎も妾のお村も斬罪に処せられ、吉田監物は半地に残したはお上の慈悲でございませぬ。又下河原清左衛門が助かると云うのは、全くお筆が孝行の然らしむる処で、親子諸共に罪を免されて出る。彼の月岡幸十郎は訴え出まして、残らず事柄が分りますと云うのは、彼の伊勢銀に這入りまして家尻を切つて二百兩の金子を取つたのも此の者で、幸十郎は後に相当のお仕置に相成りました。下河原清左衛門親子は立帰り、主家は半地にお取立てに成りましたが、奥方の耳へも此の事が這入りまして、清左衛門親子はお召返しに相成りましたから、大恩が有るので、かの腰の抜けた孫右衛門をも屋敷へ引取り、十分介抱して之を見送り、後孫右衛門は死去りましたが、下河原の家はお筆が養子を取つて家督を致しますというお芽出度いお話でございませぬ。

(扱酒井昇造速記)





## 青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料復刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「孫右衛門」と「孫兵衛」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「政談《せいだん》月《つき》の鏡《かぐみ》」となっています。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年5月9日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 政談月の鏡

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>